

第19回 全国バス学習研究集会

研究集会資料

研究主題

地域の教育課題をふまえた教育内容の創造

—— 共に生きる集団づくりを ——

期日 1984年10月26日(金) 27日(土)

場所 広島県豊田郡豊町・豊浜町  
(幼. 小. 中. 高)

## 目 次

開 催 要 項 .....	2
日 程 .....	3
全 体 会 次 第 .....	4
大会運営役員表 .....	5
分科会構成表 .....	6
推進協のあゆみ .....	10
活 動 報 告 .....	14
分科会提案要旨	
第 1 分科会 .....	21
第 2 分科会 .....	25
第 3 分科会 .....	41
第 4A 分科会 .....	47
第 4B 分科会 .....	53
第 4C 分科会 .....	55
第 5 分科会 .....	57
第 6 分科会 .....	61
第 7 分科会 .....	63

## 第19回全国バズ学習研究集会

### 開催要項

1. 開催期日 昭和59年10月26日(金)27日(土)2日間
2. 研究主題 地域の教育課題をふまえた教育内容の創造  
—— 共に生きる集団づくりを ——
3. 主催 全国バズ学習研究会  
広島県豊高校区教育推進協議会  
広島県尾道教育事務所管内へき地複式教育連盟
4. 主管 第19回全国バズ学習研究集会実行委員会
5. 後援 広島県教育委員会  
豊町ならびに豊町教育委員会  
豊浜町ならびに豊浜町教育委員会  
豊田・竹原教育振興会  
広島県高等学校教職員組合  
広島県高等学校教職員組合竹原地区支部  
広島県尾三地区高等学校同和教育推進協議会  
広島県下島地区PTA連合会
6. 会場 全体会場ならびに分科会場  
豊町立豊小学校  
授業研究会場(推進協全加盟校園)
  - (1) 豊浜町立大浜小学校 同幼稚園(兼小学校集合教育)
  - (2) 〃 豊島小学校 同幼稚園
  - (3) 豊町立沖友小学校 同幼稚園
  - (4) 〃 久比小学校 同幼稚園
  - (5) 〃 豊小学校 同幼稚園
  - (6) 豊浜町立豊浜中学校
  - (7) 豊町立豊中学校
  - (8) 広島県立豊高等学校

日

程

第 1 日 10月26日(金)	
10:00	受付(各会場)
10:30	授業研究
14:00	会場移動
15:00	開会行事 全体会
16:30	全国バス総会
17:30	会場移動
18:00	交流会
20:00	

第 2 日 10月27日(土)	
8:30	受付
9:00	分科会
11:30	全体会 閉会行事
12:30	昼食 解散

## 全 体 会 次 第

### 第1日

#### I 開 会 行 事

開会のことば	第19回全国バス学習研究集会実行委員	小 林 忠 一
主催団体あいさつ	第19回全国バス学習研究集会実行委員長	山 根 正
	全国バス学習研究会会長	永 井 辰 夫
後援団体あいさつ	広島県教育委員会 教育長	田 所 諭
	豊・豊浜町代表 豊浜町長	石 井 周
	豊・豊浜町教育委員会代表 豊浜町教育長	長谷川 敏
	広島県高等学校教職員組合執行委員長	岸 植 和 夫
歓迎のことば	豊田郡下島PTA連合会会長	梅 迫 靖 介

#### II 活 動 報 告

第19回全国バス学習研究集会事務局長 越 智 昭 孝

#### 事務連絡

### 第2日

#### I 今 後 の 課 題

名古屋大学名誉教授 塩 田 芳 久 先生

#### II 閉 会 行 事

主催団体あいさつ	第19回全国バス学習研究集会副実行委員長	中 岡 正 男
後援団体あいさつ	豊町教育委員会 教育長	佐 伯 得 三
大会に参加して		
感謝のことば	豊町立豊小学校PTA会長	竹 本 幸 夫
閉会のことば	第19回全国バス学習研究集会副実行委員長	近 藤 健 次

第19回全国バズ学習研究集会  
実行委員会役員

指 導 名古屋大学名誉教授 塩 田 芳 久 先生  
中京大学教授 杉 江 修 治 先生  
南山大学講師 石 田 裕 久 先生  
広島文教女子大講師 土 屋 孝 子 先生

実行委員長 山 根 正 (豊浜中学校長)  
副実行委員長 中 岡 正 男 (豊中学校長)  
〃 近 藤 健 次 (豊高校長)  
実行委員 平 田 福 徳 (沖友小学校長)  
〃 小 林 忠 一 (豊小学校長)  
〃 信 田 敏 之 (斎小学校長)  
〃 藤 登 哲 郎 (大浜小学校長)  
〃 中 石 照 明 (豊島小学校長)  
〃 望 月 和 夫 (久比小学校長)  
事務局長 越 智 昭 孝 (豊高校)  
事務局次長 花 本 喬 二 (豊小学校)  
〃 二 宮 刀 (豊中学校)  
〃 谷 水 永 (豊島小学校)  
〃 横 手 茂 (豊浜中学校)  
事務局員 住 吉 光 彦 (豊高校)  
〃 出 川 克 彦 (〃)  
〃 佐 伯 志 輝 代 (〃)  
〃 奥 家 豊 治 (〃)  
〃 新 開 涼 子 (〃)  
〃 中 洲 裕 美 (〃)  
〃 菊 田 一 夫 (〃)  
〃 新 谷 常 又 (〃)  
〃 笹 原 法 義 (〃)

## 第 19 回 全 国 バズ 学 習 研

校種	分科会	研究主題	研究内容	提案者
全	1	同和教育	地域の教育課題をふまえた教育内容の創造へ向けて。	沢田 映子 (兵庫 姫路 城陽小) 横手 茂 (推進協事務局)
全	2	幼稚園教育	遊びの中で経験を通していきいきと活動できる保育を考える。	推 進 協 全 園
小	3	複式教育のあり方	複式学級における授業改善のあり方。 集合教育の実践のあり方。	惣明 修市 (推進協 沖友小) 広近 先子 (推進協 大浜小)
	4	やる気を育てる授業改善	A 国語を中心に。	国田 徹也 (兵庫 加西 北条小) 松本 克彦 (愛知 春日井 西山小) 坂本 卓夫 (推進協 豊小)
			B 社会を中心に。	柴田 忠 (滋賀 愛知川小) 中野 均 (新潟 保田小) 山形 義隆 (推進協 豊島小)
			C 算数を中心に。	辻 善造 (愛知 春日井 小野小) 鈴木 睦子 (徳島 鳴門 里浦小) 宮地 キヌ子 (推進協 久比小)
中高	5	特別活動	学習集団と生活集団の統合をめざす。	目黒 泰 (岩手 盛岡 河内中) 梶田 久忠 (愛知 春日井 中部中) 大川 春治 (推進協 豊中)

究集會分科會一覽

司 會 者	助 言 者	記 録 者
岩田 好 (兵庫 的形小) 谷水 永 (推進協 豊島小)	塩田 芳久 (名誉会長) 新田 正彦 (元 豊高校長) (県教委同和教育課)	中洲 裕美 (推進協豊高)
	土屋 孝子 (文教女子大)	新開 涼子 (推進協豊高)
森本 俊和 (兵庫 男鹿小)	梶田 正巳 (名古屋大) 池上 蒼雄 (徳島 里浦小校長) 島田 恭次 (尾道教育事務所) 橋浜 浩 (尾道教育事務所)	原野 和美 (推進協沖友小) 上野 陽美 (推進協齋小)
丸山 正克 (愛知 平尾小) 北村 艶子 (徳島 元 八万南小)	麓内 信善 (北海道教育大) 稲垣 菊夫 (愛知 高森台中校長) 芝山 吉宣 (尾道教育事務所)	中段 美枝 (推進協豊小)
大関 威 (新潟 南中野山小) 中村 鐘章 (愛知 松平中)	小石 寛文 (神戸大) 吉田 武男 (兵庫 御国野小校長)	森岡 緑 (推進協豊島小)
高村 博 (滋賀 五箇荘小) 山本 剛 (兵庫 城陽小)	太田 信夫 (筑波大) 松本 重雄 (愛知 松山小校長) 山本 輝明 (尾道教育事務所)	川原 祐子 (推進協久比小)
堀場 正美 (愛知 鷹来中) 塩田 博久 (広島 安浦中)	市川 千秋 (三重大) 白井 仁 (愛知 元 中部中校長) 森田 利夫 (愛知 西山小校長) 植木 章弘 (尾道教育事務所)	岡野 光恵 (推進協豊中)



校種	分科会	研究主題	研究内容	提案者
中	6	授業改善	単元見直し学習による 授業改善。	萩原 優子 (兵庫 姫路 書写中) 伊藤 三洋 (三重 朝明高) 望月 民雄 (推進協 豊浜中)
高	7	集団づくり	基礎学力の充実をめざ す学習集団づくり。	加藤 光明 (岐阜 土岐 泉中) 黒木 潤 (推進協 豊高)

司 会 者	助 言 者	記 録 者
近藤 慎平 (岐阜 泉中) 渡川 敏行 (推進協 豊浜中)	石田 裕久 (南山大) 望月和三郎 (東京 清瀬5中校長) 開本 益夫 (尾道教育事務所)	藤原 英子 (推進協 豊浜中)
松田 福義 (兵庫 林田中) 岡本 一士 (広島 広高)	杉江 修治 (中京大) 加藤 倅一 (兵庫 四郷小校長)	佐伯志津代 (推進協 豊高)

1978年度

- 一年の準備期間を経て、本豊高校区推進協が結成される。
- 第13回全国バズ学習研究集会開催

6月13日	豊高校区教育推進協議会 結成大会	(豊高校)
28日	シンポジウム「一貫態勢とは何か」	( 〃 )
29日	豊浜町地区学習懇談会	(豊島小)
30日	豊町地区学習懇談会	(久比小)
7月24日～25日	第一回全員合宿研修会	(木 江)
8月27日～28日	第二回全員合宿研修会	(木 江)
9月 7日	各校別学習会 (豊高校)	
8日	〃 (豊 中)	
12日	〃 (豊島小)	
13日	〃 (沖友小)	
14日	〃 (豊浜中)	
26日	〃 (斎 小)	
27日	〃 (大浜小)	
10月 2日	〃 (豊 小)	
3日	〃 (久比小)	
10月20日～21日	第13回全国バズ学習研究集会 (全体会場・豊中)	
11月22日	総括会議 (豊 高)	

1979年度

- 5ヶ年計画による、実態調査が実施される。
- 各校公開授業研を毎年開催することを申し合せる。(含幼稚園)
- 第一次実態調査研究報告書「教育課題を求めて」刊行

4月16日～17日	実態調査説明会	
6月 7日	豊幼稚園、公開研究会	
28日	豊中学校 〃	} 合同研究会
29日	豊高等学校 〃	

7月30日	第2回推進協総会 (実態調査報告研究会)	(久比小)
10月4日	斎小学校 公開研究会	
11月27日	豊島小学校 公開研究会	} 合同研究会
〃	豊浜中学校 〃	
〃	久比小学校 〃	
〃	豊高等学校 〃	
11月21日～22日	第14回全国バズ学習研究集会参加	(姫路市白鷺中)
12月7日	大浜小学校 公開研究会	} 合同研究会
〃	沖友小学校	
2月21日	豊小学校	

1980年度

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第20回広島県へき地小規模校研究大会開催 (各校授業公開)</li> <li>○ 第2次実態調査実施</li> </ul> |
|--|

5月29日	第3回推進協総会 (実態調査研究会)	(久比小)
6月11日	豊幼稚園公開研究会	
6月19日	沖友小学校公開研究会	} 合同研究会
19日	大浜小学校 〃	
23日	豊高等学校 〃	} 合同研究会
24日	豊中学校 〃	
10月21日～22日	第20回広島県へき地小規模校教育研究大会	(豊小)
11月6日～7日	第15回全国バズ学習研究集会参加	(滋賀県五箇荘小)
13日	豊島小学校公開研究会	
20日	豊高等学校 〃	} 合同研究会
21日	久比小学校 〃	
1月29日	豊小学校 〃	

1981年度

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 推進協実践目標決定<br/> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;共に生きる集団づくりを&gt; &lt;教育活動の全領域で言語認識を&gt;</li> </ul> </li> <li>○ 実践目標 具体案刊行</li> <li>○ 実践目標研究会発足</li> <li>○ 就学前教育部会結成</li> </ul> |
|--|

○ 第3次実態調査実施

6月 1日	第4回推進協総会(実践目標研究会)	(久比小)
24日	沖小小学校公開研究会	} 合同研究会
〃	豊浜中学校 〃	
〃	豊高等学校 〃	
7月 7日	久比小学校 〃	
10日	豊幼稚園 〃	
11月12日~13日	第16回全国バズ学習研究集会参加(加西市北条小)	
17日	豊中学校公開研究会	} 合同研究会
18日	豊高等学校 〃	
20日	豊島小学校 〃	
26日	豊小学校 〃	
12月 8日	大浜小学校 〃	

1982年度

○ 第4次実態調査実施

○ 全国バズ学習研究集会日程が提起される。

6月 2日	第5回推進協総会(実践目標校種別研究会)	(久比小)
22日	豊島小学校同幼稚園公開研究会	
25日	豊高等学校公開研究会	
26日	基礎講座「バズ学習入門」 パネルディスカッション(豊高)	
8月27日~28日	第17回全国バズ学習研究集会	(津市 三重大学)
10月27日	第24回広島県国立幼稚園連盟研究大会提案	(福山市)
11月11日	沖友小学校公開研究会	
19日	豊小学校 〃	} 合同研究会
24日	豊高等学校 〃	
25日	豊中学校 〃	
26日	豊浜中学校 〃	
〃	大浜小学校 〃	
12月 7日	久比小学校 〃	
2月 1日	斎小学校 〃	
2月24日~25日	理科教育部会技術講習会	(沖友小)

1983年度

- 第19回全国バズ学習研究集会開催決定
- 先進校視察報告書「座標」刊行
- 第2次・3次実態調査報告書「教育課題を求めて」刊行
- 第5次実態調査実施

5月20日	新会員研修会	(登高)
6月 3日～ 4日	小学校会員先進校視察(加西市 北条小学校)	
21日	沖友小学校公開研究会	
24日～25日	中, 高校全員先進校視察(姫路市安室中学校)	
7月 4日～ 5日	就学前教育部会先進園視察(広島文教女子大附属幼稚園)	
8月27日	第6回推進協総会(実態調査研究会)	(久比小)
10月 7日～ 8日	第18回全国バズ学習研究集会参加	(五泉市五泉南小)
11日	齋小学校 公開研究会	
26日	久比小学校 //	
11月 9日	豊浜中学校 //	} 合同公開研究会
10日	豊中学校 //	
11日	登高等学校 //	
15日	登島小学校 //	
25日	登小学校 //	
29日	大浜小学校 //	

1984年度

- 第19回全国バズ学習研究集会
- 実践講座 学習指導案トレーニング 実践交流 推進協内交流研究会
- 推進協結成時より
 

協議会(決議機関)	—————	40回
実態調査研究委員会	—————	19回
就学前教育部会	—————	16回
その他領域別	—————	約50回

## 私たちは何を求めてきたか。

—— これまでの実践のまとめ ——

1978年10月20日、21日の両日、第13回全国バズ学習研究集会を、この地で開催させていただきました。

そして、丁度6年の才月が流れました。

再び全国から先生方においでいただき、第19回全国バズ学習研究集会を開催させていただきます。

同和教育とバズ学習の統合をめざしながら、「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に、当面、幼、小、中、高一貫教育態勢づくりを目標に発足しました。広島県豊高校区教育推進協議会は、第13回全国バズ学習研究集会開催という具体的な行動目標なしには、まだ多くの才月を費やさなければ組織できなかつたであろうと思います。

全国の先生方の、いわば胸をお借りしてのスタートでありました。

第13回全国集会で私たちが用意しました資料は160ページの冊子でありました。しかし、その3分の2は全国の先生方から送っていただいた分科会提案要旨であって、私たちの創ったものはわずか50ページに満たないものでした。

だから私たちは、これからの活動を見ていて下さい。必ず再び開催し、その後の取り組みを見ていただきますから。そうお約束する以外にありませんでした。

その意味では本日お約束を果たしたことになります。しかし6年間の成果をごらん下さいと胸を張れるのかといえば、やはり残念ながらひとつの過程に過ぎません。

前回お越し下さり、今日同じ学校で授業をごらん下さった先生の中には、前回の方がよかったじゃないかという印象をお持ちの方もいらっしゃるだろうと思います。

事実この6年間、各学校単位でみていくと、さまざまな課外条件の中で浮き沈みをしてまいりました。今停滞期にある学校もあります。

何か堂々巡りをしているだけに感じられるかも知れません。しかし、きわめて緩やかではあるが、着実に螺旋階段を昇りつつあると信じています。

本文の前に、豊高校区推進協の歩みとして、編年体で行事だけを書かせていただいています。それでも4ページを費やしました。

これまでの実践をまとめさせていただくと申しましても、実に複雑にからみ合っており、その総べてをまとめ切る力量を持ち合せていません。

したがって、今日ご参加下さった授業研究、明日の分科会提案の内容など総べてを含めてご理解いただけるものと甘えさせていただき、主要に組織的な流れを概括していくことで、その責めを果たさせていただきます。

### 第13回全国集会とその後

78年10月20日、豊町立豊中学校体育館において、本日とほぼ同じ設定の中で、基調提起と銘うって、大略次のような提起をさせていただきました。

この地域の幼・小・中・高総べての学校教職員が結集して、豊高校区教育推進協議会を組織し新しく教育運動を展開しようとしている背景は地域の実態にある。

瀬戸内海の離島という地理的な条件が、行政的な手だてのなさや相まって、常に疎外状況をつくり出している中で、これまで幾度かの盛衰をくり返してきたが、島民の進取の気性と開拓精神が、この地をみかんの代表的な産地にまで育ててきたり、また漁業も新しい漁場の発見や漁法の開発をさせてきた。

しかし、島の疎外状況が、島全体を差別の対象にさせてしまい、その中で下見て暮らせという分裂を呼び起こし、差別が構造化している実態がある。

そして、みかん産業の構造的な不振に代表される産業の低迷が、若者の流出となり過疎化がしたいに進行し、家庭状況も悪化している。

これらの実態をはね返すためにも、今教育の果たす役割は大きい。

その基本的な観点は、地域住民が真に連帯できる基盤づくりとして、被差別部落の完全解放をめざす同和教育運動を高めることにある。

今、そのために地域ぐるみの教育を志向しなければならない。

私の子から、私たちの子への発想の転換を通して、地域の子どもは地域の責任で育てるといって地域教育づくりを進めなければならない。

そのことを我々の側からとらえると「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」ということになる。

そして、この研究主題を追求するための推進母体を確立するために、幼・小・中、高一貫教育態勢づくりをまずめざさなければならない。

第13回全国集会において、全国の先生方の全面的なご援助によって、私たちが当初期待しておりました上述のねらいを具体化する第一歩とさせていただきました。

私たちには予想外の評価もいただきました。

しかし、お約束通りここが起点であり、これから具体的にどのように活動を進めていくかが最大の課題でありました。

第13回全国集会の各校の総括を経て全体での総括会議を終えても、なお具体的な方向付けが明確になりませんでした。

今後も授業改善を軸に活動を進めていくことは確認し合いながらも、そこから一歩踏み出せない背景は何かを話し合っていく間にやっと気付いたことがありました。

それは同和教育の観点に立って、児童・生徒の進路保障をめざす取り組みを、地域の教育課題をふまえて推進するといいますが、実は眼前にいる児童・生徒を本当につかんでいないのでは



なからうかという疑問でありました。

つかんでいるつもりになっているだけで、科学的にひとりひとりの子どもの実態が見えていないのではないかという反省でもありました。

教育の科学化を標榜するバズ学習の観点に立っても、やはり足元の問題であります。

かつて、豊島小学校において医学部門まで含めた児童の実態調査が行われ、その調査結果がやがて豊浜中学校でのバズ学習へと結実していった過去の実践に学び、改めて全児童、生徒を対象に実態調査を本年度から実施することが決定されました。

また、授業改善をより確かなものにするために、各校共一年に一度は必ず公開研究会を開催することも申し合され、記念すべき第一年度は終了致しました。

#### 実態調査から実践目標へ

今回の実態調査は、主要には私たちの共通する教育課題を明らかにするのがねらいでありましたので、児童・生徒の学校生活を中心に調査を進めることにし、どのように実施するかについては、ご指導いただいている塩田芳久先生にご相談申し上げました。

そして、塩田先生のご指導によって、知能検査(教研式)標準学力検査(教研式)学習適応性検査(教研式)学級社会構造調査(杉江先生)の4領域のバッテリーを組んでいただきました。

研究スタッフは、塩田芳久先生をはじめ、杉江修治先生(中京大)、鹿内信善先生(当時大同工大第一次のみ)、石田裕久先生(南山大)、石田勢津子先生(名古屋大)の5名の先生にお願い致しました。

いよいよ実施するとなると、やはりいろいろ各校現場での調整が必要でした。

最終的に決定した実施方法は次のようになりました。

1. 調査は5ケ年間継続して行う。
2. 学校別、クラス別の比較をさけるために、個別のデータは当該校のみ示し公表しない。
3. 学力検査は前年度を対象に行う。
4. したがって、4～5月に検査を実施する。
5. 5ケ年間継続して記載できる個票をつくり、次へと送って個の追跡を行う。

'79年4月、まず調査方法の学習から始まり、各校代表による実態調査研究委員会が組織され4～5月に第一次の実態調査が実施されました。

そのデータ処理、分析、考案を研究スタッフにお願いし、第1次実態調査研究報告書「教育課題を求めて」が発行されたのは、'80年3月でした。

続いて第2次調査と、調査は毎年度実施されていくのですが、そのデータを読み取り具体的な教育課題を導き出す作業はなかなか進捗致しません。

第1次の実態調査結果にもとづく実態調査研究委員会の研究協議の末、具体的な実践目標がまとめられたのは、'80年度末でありました。

そして、'81年度、実践目標として「共に生きる集団づくりを」「教育活動の全領域で言語認識を」の2項目を全会員に提示致しました。

それと同時に実践目標具体化のために、研究委員会の下部組織として、実践目標研究会が自主参加によって結成され、実践目標具体案なる冊子が全会員に届いたのは、その年の10月でありました。

すでに実施から3年経過しておりました。

くわしくは本日資料としてお手元に届けております、第2次、第3次報告書をごらん下さればいくらかお解りいただけると存じますが、総べてが遅れてまいります。

すでに昨年度初め、第5次実態調査が終了致しております。しかしその最終報告書はまだできていないというよりもできないでいるというのが現状です。

この間、毎年度研究スタッフの先生方からきびしいご指摘をいただけてきましたし、調査のデータも必ずしも望ましい方向へ進んでいることを示していません。

この調査結果にもとづいて、どのような実践を具体的にこなったのか。そして、その結果どのように変容して行ったか。という研究と実践のサイクル化がこれまでできていませんでした。

常に実践が立ち遅れ、研究者の先生方にご提供できる資料が少ないという段階で今回まで経過してしまいました。つまり生かし切っていませんでした。

私たちは今やっと追い付いてきたと思っています。

この貴重な5ケ年の実態調査データを基礎として、今年度から始めた追跡調査と実践の突き合せの中で、より確かな実践を始めようとしているとお受け取りいただければ幸いです。

#### 公開研究会を通して

私たちは先に申しましたように、授業改善を組織活動の軸にしてまいりました。

認知的目標と態度目標の同時達成をめざすというバズ学習の基本理念に対する同和教育の観点からのアプローチであります。

極論すれば、授業の中でこそ生活指導をということでしょう。

また、人間関係の基盤としての協同事態の体得こそが、今日の差別社会を打破する基本的なエネルギーを生み出すと思います。

そうした同和教育とバズ学習の統合を込めての授業改善です。

毎年度一度は必ず公開研究会を開催するという、初年度に組織内において確認されました方針はこの5年間堅持されてきました。

もちろん、日常的に校内研究会も月例化している学校がふえてきました。

だれもある面では授業を公開することにいくらかの抵抗を持っているのが本音のところでしょうが、少なくともしなければならぬ仕事として定着してきたように思います。

もう表面上は公開し授業研究をするのが当たり前になってきました。いわば建て前に本音がぐんと近付いてきたといえましょう。

80年10月、第20回広島県へき地小規模校教育研究大会の開催を推進協がお引き受けした段階では、すでに運営上の問題だけに集中すればよい状況になっていました。

当初、公開研究会として全校が合同で他地域へご案内するのが珍らしかったのか、かなり多く

の先生方がご参加下さっていました。

しかし、年を追うごとに、他地域からの参加は少なくなってきて、組織内の実践交流的な色彩が色濃くなってまいりました。

たしかに年間10回を越える公開研究会があるのですから、付き合い切れないという面もあったように思いますが、参加される先生方からみれば毎年同じことをやっているだけではないかとお考えになったのだと思います。

事実継続は力なりだけであった時期もありました。実践目標の下位目標を各校で設定しての取り組みではありましたが、研究会のための取り組みという枠からなかなか抜け出すことはできませんでした。あるいは今日でもそうかも知れません。

ただ、この繰り返しを通して、よりよい授業への模索が決して形としては表われなかったが続けられてきていたのでしょう。単元見直し学習の有効性が理解され、次第に単元見直し学習による授業研究が増えてまいりました。

#### バズ・単元見直し学習

81年10月、滋賀県五個荘小学校と塩田芳久先生および研究グループの先生方による協同研究の成果が「バズ学習による授業改善」と標題されて刊行されました。

ここにご参集の先生方はすでに学習なさっていることと思いますが、塩田先生が永年温めてこられた、心理学における洞察の概念にもとづかれた学習の構造化の理論と20年近い五個荘小学校の実践の積み上げとの中で結実した成果であり、刊行された段階ですでにその有効性の論議には終止符が打たれ、どう自分の実践に組み入れていくかが課題になったといえましょ。

私たちが早くから塩田先生のご指導によって形だけは取り組んでまいりました。中学校では単元単位見直し学習と呼び、高校ではユニット学習と呼んできましたし、それぞれ指導案のモデルもつくっておりました。

しかし実態は、単なる学習指導法の一方法であるにとらえている者、学習指導案の書き方のひとつとしてとらえている者、この学校のやり方だと割り切っている者など、基本的な学習抜きでさまざまに受け止められてきました。

中にはこれを強制と受け止め感情的なレベルの反発もあり、あえて無視する者もいました。

もちろん、私たちは指導法の画一化をねらっているわけではありません。よりよき学習法を求めの日常活動です。しかし徹底した学習を日常的に行うにはあまりにも多忙な現実もあります。

そのような低迷から脱し切れたのかといえば、とても言い切れない状況下にあります。単元見直し学習を有効に活用できる基盤は、徹底した学習技能の訓練による技能習得が必要であるにもかかわらず、態度的目標として掲げていることでよしとして、認知的目標に突っ走っていたという現状に対する反省から、一定の合意が始まったところからのように思われます。

昨年度当初に、第19回全国集会の開催をお引き受けすることが決定し、まず全員参加の先進校視察、その研修内容を全員が提出し集団決定方式で編集された報告書「座標」の刊行などを通し、昨年度の公開研究会は大部分単元見直し学習法による授業研究になってきました。

今年度、4月25日に開催しました総会において、始めて、バズ学習の理論にもとづいた単元単位の学習指導法に一定の合意が得られたことを表明すると同時に、その学習法の呼称を「バズ・単元見通し学習」で統一することを提唱したのであります。

一学期の推進協内研究会以降、本日の授業研究に至るまで、私たちはどのように活用したらよいかという発想への転換がほぼでき上がったと考えています。

そして、本日の授業研究の学習指導案(資料Ⅱ)をごらんいただいて、一応体裁が整ってきていることはご理解いただけると思います。

ただ、あくまでも一応体裁が整った段階であり、これからが教育研究であろうと思います。

バズ学習が解る解らないの問題ではなくて、実は教育の本質をどこまで追求しているかいないかの問題であるという観点に立てる日は近かるうと思っています。

#### 組織を活かすために

私たちの豊高校区教育推進協議会は、文字通り地域の教育を推進するために、校種の違う各校が集まり、一定のコンセンサスが得られた教育活動を共に行うという協議体です。

より創造的な活動を行なうための制約になるものは排除しようという考え方から、これまでも多くの論議を呼びましたが、未だに規約も持たないで運営してまいりました。

しかし、組織として活動の方向性が打ち出された場合、その遂行に当ってはやはり一定の強制力を生んでまいります。

結成以来7年目の若い組織ではありますが、第13回全国集会当時の会員はすでに3分の1を割っていますし、学校によればすっかり入れ替わっているところもあります。結成に参画された校長さん方も、すでに昨年度末で全員現場を去られました。

そのような状況の中では、各校の現場での討議を経て、十分な話し合いの結果出た結論であっても、組織的な手続きとしては、何の問題もないでは済まされないことがあります。

何かしら上からやらされているという印象を避け難い現実があります。

本当にひとりひとりの会員が私たちの推進協であるという主体的な参加と活動が可能な組織とするためには、組織内に自主的な研究サークルが生まれ、そこでの活動を保障していく態勢がつけられなければならないと考えています。

私たちはこれを領域別研究と呼んでいます。まだ継続的な活動になっているサークルがない状況です。

ひとつには既存の多くの研究組織があり、それに屋上屋を重ねることになる現実があり、もはや物理的に継続が無理だという背景もありますが、やはり研究テーマの具体性と、総べてを統合していく発想がきたえられなければならないと思っています。

現在、継続した活動が続けられていますのは、組織内5幼稚園教員による、就学前教育部会であり、81年度に組織されてから今日まで、かなりきびしい条件で活動が進められています。

今次全国集会におきましても、ひとつの分科会を受け持ってもらっています。

くわしくは、第2分科会資料をごらんいただきたいと思いますが、過疎化の進行の中で、この

地域における幼児教育は一般町民に対する啓発活動も含めて大へん重要な時期にさしかかっています。

その中での一貫教育態勢の要としての役割が期待されています。

今日までの私たちの活動は、このような活動の土壌づくりにはなったと自負しています。

地域に支えられて

私たちのこれまでの活動は、私たちがひとつずつ話し合い合意に達し、そして不十分ながら推進してきたと、ここまでご報告申し上げてきました。

すでにお気づきだと思いますが、この活動を遂行するためには莫大な財政的な援助がなければなりません。

私たちは結成以来、7年間、豊町・豊浜町、両町の町長さんを初め町の理事者の方々、両町教育委員会の深いご理解の中で育てられてまいりました。

私たちの提出する活動計画と予算申請に対して、過疎化と行革のきびしい財政事情にもかかわらず、常に満額の予算措置をして下さいました。

昨年度は、本研究集会を成功させるために必要ではないのかと、準備のための予算を上乗せさせして下さいました。

私たちの運動にいくらかでもいい評価がいただけるとしたら、それは私たちの力よりもこうした両町と、その背後にある地域の方々の、地域教育に寄せる熱い願いに支えられ、引き上げられてできたことだと思っています。

いささか内輪めいて恐縮に存じますが、この席をお借りして両町に対して深く感謝申し上げることをお許しいただきたいと思っています。

今日、日本の教育をめぐる、さまざまな論議がたたかわされています。先日は、臨教審も発足致しました。

確かに21世紀を展望した、新しい教育改革が必要な時であろうと思います。そのことはいささかも異論をはさむつもりはありません。

しかし、そうした時期だけに、私たちはこの地域にこだわり続ける教育活動を展開しなければならないと思っています。

ひとりひとりの子どもを見つめ、その背景にある地域の現実に深く参入し、子どもと、そして地域と、共に生きていく私たちでなければ、どのようにすばらしい教育制度がつくれ、教育環境が整えられたとしても、血のかよう教育は成立しないと考えるからです。

私たちの主体をきたえあげ、同和教育とバズ学習の統合を展望して、日々の実践を削り上げていきます。

私たちはまた今後の決意を申し述べる以外に締めくくることはありません。

全国からご参集下さいました先生方に、本研究集会はもとより今後もこれまで以上のお力添えをお願い申し上げて、活動報告をさせていただきます。

## 第1分科会 同和教育

### 地域の教育課題をふまえた教育内容の創造

推進協事務局 横手 茂

はじめに

地域の教育課題を同和教育の観点に立ってとらえるということは、私達が同和教育をどのようにとらえているかにかかっている。

したがって、まず最初に私達のとらえている同和教育について述べたい。

同和教育は教育の場において過去から今日に至るまで、被差別部落出身者を中心に疎外状況におかれた多くの人たちを差別してきたという事実の告発によって始まっている。そしてその差別の解消をめざす全ての教育的手立てを指している。

端的にいうと、被差別部落に集中的象徴的に現象している差別実態からの完全な解放をめざす教育が同和教育である。

今日、民主教育の理想を実現するためには、まずなによりもこの人権侵害の事実の解消がその前提となる。つまり今日最も緊急を要する教育課題であると同時に、教育の本質に関っている問題である。

同和教育は広範な解放運動の一翼をになり、人間変革の運動でもある。

そのためには、全ての現象を本質に返していくという科学的な態度がなければならない。

なぜなら、眼前の差別実態を解消するためには、対症療法的な対応では根本的な解決につながらないからである。もちろん対症療法的手立ての必要な場合もある。

差別は分裂支配の手段として人為的につくられたものであるから、このようにまず差別を見抜くことが必要であるが、見抜いただけでは解決にならない。

差別を許さないという行動を伴う積極的態度がなければならない。

そのためには、その差別を自分のこととしてとらえる、即ち部落差別を自己との関りでとらえなければならない。それがなければ単なる同情や恩恵を与えるといった位置に止まってしまう。

いわば、同和教育は自己の変革を包含した教育活動である。

いささか要約にすぎると思うが、基本的な観点を以上のようにとらえている。

#### 地域の実態

私達の地域の実態をとらえるという時、しばしば自己の活動を正当化する意識が働き、困難性を正当化するために、地域の特殊性のみを強調するという傾向がみられる。

このことも差別性の表われであるが、これから述べる地域の実態は私達の地域固有のものでなく、本質的には普遍性のある実態であるをとらえていることを予めお断りする。

また、私達の地域の実態といっても、江戸時代からの小さな村落、現在の小学校区ごとにもその実態もかなり様相が異なってくる。

その上、このような小さな村落になぜ被差別部落(草田身分安芸藩の呼称)が必要であったの

かといった歴史的な解明を初め、まだまだこれから実態を明らかにしなければならない問題が多く残されていて、今そうした調査研究が始まろうとしている段階である。

したがって、教育課題を導き出すという側面にのみしぼってとらえてみたい。

私達のこの地域は歴史的にはさまざまな消長があり、水軍の本拠地のひとつであったことも、また海上交易の中継基地として栄えた御手洗港など、繁栄の歴史もあるにはあるが、島という地理的条件が常に生活に一定の制約を与えていた。

狭い土地、とりわけ農業の基本である水田はわずかで、芋・麦などに頼る生活、不足勝ちの水など、回りが海にかこまれていて、魚介類など海産物もあり、必ずしも毎日の暮らしに事欠かなかったかも知れないが、基本的には貧困な状況におかれていた。

一方陸地部はどうであったかといえば、やはり下見て暮らす以外に立つ瀬のない過酷な収奪の中で農民を初めとする民衆の暮らしがあった。

その下見て暮らすという玉突き的な現象の地域的な終点に島が位置付けていた。その差別の歴史は永く、分裂の手段としてつくられた差別は当然のこととして、この島内においても幾重にも差別構造をつくり出してきたのである。

いずれの地域にもあった農民階層内での土地所有高による身分階層分化が、非常に小さな耕作反別の中で起きていたと考えられる。

また、集落ごとに他集落を低める言動があったり、やがて出現してきた漁民階層が差別の対象にもなってきた。

こうした差別構造はたえず差別意識を再生産し、近年、部落解放同盟を中心にした解放運動の高まり、それに呼応する同和教育運動の進展があっても、表面的にはいくらか改善がみられるとしても、やはり同じ状況が続いている。

このことが端的に現象されているのが差別事件である。

氷山の一角的な現象である差別事件の続発とっていい状況がある。

多くは学校において起きているが、その内容は被差別部落大衆を傷付けて止まない賤称語が相手を低め合うという(ここにも問題がある)やりとりの中で、罵倒することばのひとつとして唐突な感じで出てくるのである。

そのような差別言動に対する背景を明らかにするための事実確認を行くと、大部分のケースは、何時、誰れから教わったか判然としない。いつの間にかである。大人の会話の中で何度も耳にしている。中学校段階くらいからは自分たちの仲間でもつかうようになった。というのである。

つまり、現在の大人たちが差別意識を持たされてきた経過とはほぼ同じ状態が続いていることになるのである。

この地域における実態は決して否定的な側面ばかりではなく、いち速くみかん栽培を始めたり、新しい漁法を開発したりという進取の気性に富んだすばらしい過去もあるが、今やはりこの実態を直視するところから始めなければならないと考える。

## 学校の実態

前述のような地域の実態の中で育ってきた子どもたちが、その地域と無関係ではないことは、差別事件の中で明確に表われている。

いい、悪いにつけ、決して地域と切り離すことはできない存在である。

また子どもに親たちの願いが色濃く反映しており、時としては子どもをはさんで教員と親とがあたかも綱引きをしているかのような状況も生まれる。

大部分の親たちは、島差別として受け続けてきた教育疎外百年の歴史を背負っており、学校へ行くというのは島外へ出ることであり、島の外にこそすばらしい教育があるととらえている側面が強く、小・中の教育も他の地域以上にその予備校的なものとして期待しているという面もある。地域教育づくりへの発想の転換が困難なところである。

今日までの学校教育において、これまで述べてきたような差別を助長していく状況を打開する方策がとられてきたかといえば、同和教育運動が示しているようにやはり差別を温存助長する、いわゆる差別教育がなされてきたのである。

それを本質に戻していえば、今日の社会の論理である競争の論理にもとづく序列づけが常に底流を形成してきていたことにあるととらえる。

競争の論理は、一定の平等感を持たせ、敗者を仕方がないとあきらめさせる作用がある。またある事象の価値観を全体の価値として優劣の判定にまで持ち込んでしまう。

本来教育はひとりひとりの人間の可能性をより望ましい方向に育成していくことが本務であるにもかかわらず、むしろ序列を固定化する働きをしている。

人間が相互に尊重し合い、思想・信条などの相違は相違として認め合いながら、一定の合意に到達し協力し合って、社会を形成していくという今日の民主社会は根幹において協同の論理で貫かれていなければならない。

したがって、学校教育は本質において徹底した協同の論理に置き換えなければならない。

そのため、まず教師自身の変革が第一歩である。

今回、推進協において実施した実態調査の結果は、学校における教育実践の結果の一側面の測定ではあるが、全国的な水準に総体的には達していないという結果が出ている。

とりわけ学力に関して成就値のマイナス傾向、つまり本来可能性として持っている知能に対して、学習効果が上がっていないという学力不振の傾向がみられることは、学力保障の観点に立って見た時大きな課題である。

今日、学力観に対するさまざまな論議はあるとしても、人間の生きる力の基盤としての知能獲得を誰も否定することはできない。

学習適応性において、学級内の人間関係において、いずれも多くの問題をかかえていることも実態調査が明らかにしている。

なによりも問題なのは、5ヶ年の追跡の結果として、この5ヶ年間に改善の跡がデータの的に表われていないという事実である。

この実態こそが今最大の課題である。



## 同和教育とバズ学習の統合

今日なお差別構造のもとにある地域の実態，その影響下から教師の体質も含めて克服し切れない学校の実態，その中で生徒の実態を考えてみる時，学校教育における解決の方向性は自ずと明確になっているととらえている。

まず，学校教育の場において，協同事態の設定に一貫性を持たせることで，協同を自己の活動を通じて体得させることであり，そこでより望ましい人間関係を培うことである。

それには，これまでのように，特別活動は協同事態で，授業は競争事態で進められてはならないことはいうまでもない。

とりわけ，1日の学校生活の大部分を過ごす授業における改善がなによりも重要である。

認知的目標と態度的目標の同時達成をねらうという，バズ学習の基本理念は，今日の実態改善にまさに合致していると考えている。

しかも，学力保障の観点に立った時も，より有効度が高いという結果も出ている。また，生涯教育の面からも欠かせない，学習技能の習得も協同事態で身に付けられ，社会人としての資質が涵養されるのである。

このように考えていくと，部落解放の課題にこたえられる学校教育の中心課題は，授業を軸にした学習活動の改善であるといえる。

しかし，一般的に言って同和教育の生命は授業改善であるといってしまうと，やはり大きく外れてしまうのである。

それは，その教育活動の中で育っていく子どもの側の問題である以前に，援助者である私達自身がどうなのかという問題である。

地域の状況を，親の願いを子どもの中に見い出すと同時に，一方では教師の姿勢も大きく子どもたちに反映しているからである。

これまでが差別教育であったというのは，地域と親と教師とが差別することに関しては概ね合意ができていたということになる。

したがって，まずなによりも教師の主体的な変革，つまりこれまで身に付けさせられてきた差別体質の克服が大前提になる。

変革するためにはどうすればよいか，これは解ってはいるが具体的な行動に踏み切れない状況であろうと思う。そこに差別体質が現象しているともいえる。

今，何よりも教師集団の徹底した論議を子ども中心に起こすことである。

おわりに

同和教育の観点に立ち，私達をとり巻く状況と活動の問題点とを極めて概略的にまとめた。

この道すじに今後の私達の活動があると考えているからである。

しかし，私達の活動を真に創造的な活動へと高めていくためには，まだまだ多くの解決しなければならない課題があると同時に，まだとらえられていない課題もあるように思われてならないのである。ご指摘を受けたい。

## 第2分科会 幼稚園教育

研究内容 遊びの中で経験を通していきいきと活動できる保育を考える

豊高校区推進協 就学前教育部会

### 就学前教育部会の活動

豊高校区推進協就学前教育部会は、1981年度から推進協直属の組織として誕生しました。

'80年度、推進協において組織内全児童・生徒の実態調査が5ヶ年計画で実施されることになり、その取り組みが始まった時点で、これまでの付属幼稚園という形態の中での弱点が明らかになってきました。

それは幼稚園へは小学校を経過して伝わってくるということからの情報不足、そして任用上の違いと教員が少数であることなどからの研修態勢の不備があったからでした。

そのために各幼稚園間の相互交流の必要性は認めながらも思うにまかせない現状でした。

一方、地域における幼児教育に対する認識は、いわゆる子守りをしてくれればいいことであったり、小学校教育の先取りが要求であったりであって、子どもの全人的発達において幼児段階の教育がいかに大切な役割を持っているかについては殆んど考えてもらえないというものでありました。

これは今日なお認識を深めていただいている状況ではありません。

このような背景からの、幼稚園教員の要求の中でつくられた組織です。

'81年5月29日(金)このような経過の中で第1回就学前教育部会が開催されました。

研修を積み上げていくためには、継続的に指導を受けられるように常任講師を依頼することになり、美作女子大 村上冽先生に就任していただきました。

翌年度から今日まで、広島文教女子大 土屋孝子先生にご指導を仰いでいます。

結成から今日まで、本部会の研究主題は幼児の全生活そのものである「遊び」の中で、いかに豊かな創造性をつちかっていくのか、即ち「遊びを中核にした保育のあり方」でした。

幼児は遊びの中で、生きるたしかさの総てを学習していきます。

それを私たちはどう援助していったらいいのか。ここに中心をおいて、公開保育を行なってきました。

はじめは、私たち自身が子どものところでいう「遊び」といわゆる大人の遊びの違いを明確にできていませんでしたし、管理としつけを混同したりという段階でした。

結成以来3年を経過した今日、やっとそのことがわかりかけてきたという段階だと思えますが一方では過疎化が進行する中で幼児の減少によるクラス減など、新しい課題も生まれてきています。

また、子どものおかれている状況も大きく変化してきています。

その中で、私たち幼児教育に携わる者の任務はますます増大してきています。

私たちの活動は、今スタートしたばかりで、これからどう子どもを守り育てていくかに焦点をあてた、日常実践を続けていきます。

周囲が緑や海に囲まれ、ほとんどの家庭が、農家でありながら、自然に親しむ機会が失われている子ども達です。肌で自然に親しむ中で、発見したり、感動したりする喜びを味わわせるために園では、子ども達が中心になって、ニワトリ・季節の野菜・花の世話などをさせています。

裏庭で取れたキュウリ・トマト、を使って子ども達で、サラダ作りへと、発展し、給食時に全園児で試食しました。

毎日、子ども達は、登園しては芋の成長を喜びながら、土の中に埋っている芋の不思議や、芋を掘り当てようとする期待と、喜びを十分味わわせ、芋の数や大きさを調べさせながら、焼き芋を通して、収穫の喜びを持たせていきます。

また、園外保育を、たびたび行い、そこで見つけたいろいろな植物や、小動物を、持ち帰り、観察や、遊びにまで発展させています。そうする中で、遊具に依存しなく、囲りのいろいろな物を使っての遊びや、友達とかかわっての遊びが広がっていくようになりました。

本園では、体力作りとして、年間を通し、乾布摩擦・裸マラソンを行っていく中で、風邪ひきが少なくなり、又薄着の習慣が身につくつあります。

町内の3園で、運動能力テストを行い、記録を基に、劣っている運動、特に昨年度は、飛ぶ力がなく、遊びの中に工夫して取り入れ、自然に身につけさせるように心がけています。又、扁平足解消へと、竹ふみも、毎日行っています。

たて割集団については、子どものようすを見ながら、子どもたちがその必要と、興味に応じ、園内では、自由に交流し、活動しています。

## 保育指導案

豊町立豊幼稚園

指導者 大 番 五十鈴

大 亀 美保子

横 手 ひづる

1. 日 時 昭和59年10月26日
2. 組 名 はとぐみ(4才児) 男子10名 女子13名  
つばめぐみ(5才児) 男子7名 女子7名 } 合計52名  
うさぎぐみ(5才児) 男子8名 女子7名 }
3. 主 題 収穫の喜びを味わう。
4. ねらい 焼き芋を通して収穫の喜びを味わう。
5. 保育計画

日	幼児の活動	留 意 点
6月23日	芋づるを見る。 芋づるを植える。	○芋はつるのどこにできるかを知らせる。 ○土に植える方法を知らせる。 ○間隔を考えさせながら、ひとりひとりに植えさせる。
6月25日	絵本「大きな大きなおいも」を見て話し合う。	○絵本を見て、大きなおいもをどのように育てていったらよいかについて、みんなで話し合いをさせ、喜んで芋の世話ができるようにする。
8月	水やり、草取り、観察をする。 ○くきがどんなに大きくなったか、つるがどのくらい伸びたかをみる。 ○土の中まで水がしみこむように十分水をかける	○どんな世話があるか話し合いをする。 ○芋づると草を間違わないように見分けをさせる。 ○水をやった後とその前の芋づるのようすに気付かせる
9月	草取り、観察をする。	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○芋づるの成長の喜びを絵で表現する。</li> <li>○芋づるを大切にしながら草をぬく。</li> </ul>	
10月25日	<ul style="list-style-type: none"> <li>芋掘りをする。</li> <li>○自分の植えた芋づるを掘りおこす。</li> <li>○くきに芋がついているようすを見て喜ぶ。</li> <li>○芋から出る白いしるを不思議にみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○芋掘りの歌を唱いながら芋掘りへの期待をもたせる。</li> <li>○芋掘りを十分に楽しませる。</li> <li>○一本のつるから大小いろいろな形の芋ができていることを実際に体験させながら芋の性質にも気付かせる。</li> </ul>
10月26日 本日の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>焼芋をする。</li> <li>○芋が育ってきたようすを思い出す。(絵をみながら)</li> <li>○芋のつるで遊ぶ</li> <li>○焼芋を食べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○長い間芋の世話をしてきたようすを思い出させる中で芋への関心を深めながら焼き芋を通して収穫の喜びを味わう。</li> </ul>

## あそびの中での経験を通していきいきと活動できる保育を考える

久比幼稚園

こどもは日々の生活経験を基に成長している。健康な身体と心を育て、充実した毎日が送れるよう環境を整備し、日々の保育をすすめている。

豊町内の就学前部会では、運動能力テストを行い不得手な運動を平素のあそびの中にくみこむなどして発達をうながすようとりくみ、今年度は基本的な生活習慣調査も行い、これを基に保護者の協力を得るようになっている。

### 1. 本園の実態について

本園は小学校併設の幼稚園である。昭和55年度までは年令別2クラスであったが、昭和57・58年度は混合1クラス、今年度は年令別2クラス、来年度は混合1クラスとなり、年々園児数が減少している。

### 2. 健康について

本園では、朝みんなで乾布まさつ・裸マラソン・竹ふみをして身体をきたえている。

### 3. あそび場コーナーの設置について

こども達は、自分の好きなあそびをしている時は実にいきいきとしている。やろうとする意欲を育て、こども同志のつながりを広げるよう絵本コーナー・造形コーナー・遊具コーナーを設け、年少児・年長児がかかわりあってあそびを発展させるよう配慮している。

### 4. あそびの経験の増大について

こども達の人数も少なくなり、あそびを知らない子が多い。みんなで室内や戸外での集団あそび・鬼あそび・ジャンケンあそびなどをして、みんなであそび楽しさを味あわせるようになっている。

### 5. 合同保育について

豊町内の沖友幼稚園と週1回の合同保育を行っている。

保育指導案

豊町立久比幼稚園

指導者 石田 瑞枝

田中 時恵

1. 日時 昭和59年10月26日
2. 組名 桃組(4才児) 男子8名 女子4名 } 合計26名  
星組(5才児) 男子6名 女子8名
3. 主題 乗物をつくってあそぼう
4. ねらい ○いろいろな材料を使って創意工夫し、みんなで協力して乗物をつくる。  
○出来あがった乗物でみんななかよく遊ぶ。
5. 保育計画

時間	幼 児 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
3	○乗ったり見たりした乗物について話し合い、どんな乗物があるか知る。 ○好きな乗物の絵を描いたり、粘土で作ったりする。	○雰囲気盛りあげ、話しやすいようにする。 ○自分の好きな乗り物について発表したり、のびのびと表現できるように助言する。
2	○乗物づくりについて話し合う。 ○乗物をつくって遊ぶ。	○どんな乗物を作りたいか話し合わせ、今まで集めている材料で創意工夫して作れるよう助言する。
1	○乗って遊べる乗物づくりについて話し合う。	○どのようにしたら乗れるものができるか材料、つくり方について考え、話し合わせる。
1	○みんなで協力して、材料集めをする。	○事前に空箱などをとっておいてもらうようマーケットなどをお願いしておく。 ○みんなで協力して材料を運ぶよう、ことばがけをする。
1 本時	○みんなが乗れる乗物をつくってあそぶ。	○乗れる乗物をみんなで協力し、工夫してつくるよう助言する。

## あそびの中での経験を通して、いきいきと活動できる保育を考える

— 自由あそびの充実を目ざして —

沖友幼稚園

ここ数年間の園児数は、年少児・年長児を合わせても10名以下の園である。

自由あそびの内容に変化がない、自分から進んで活動するのではなく、友だちがしているからする。友だちが気になり、自分なりの考え、表現ができない実態があった。そこで、特にあそびを数多く経験させると共に、子ども達の好きなままごと・製作・水あそび・どろんこあそびができるよう環境を整える。また、自分なりの行動・表現ができることを目ざす。

### 1. 自由あそびについて

- 子ども達は、取り出しやすい一定の場所から、いつでも好きな時に、紙・あき箱を出しては、長く切ったり、切り紙模様、あき箱製作等を行なう。
- ごさ・ナイフを使って、草でごちそうづくりをするなどのままごとあそびをする。
- 園近くのみそで、かに取り、物を流したり、水流しを楽しむ。
- 園児数4名の時の一年間の自由あそびは、戸外でボールあそび、ブランコおにごっこ、ひこうきとばし。室内では、あき箱・紙・粘土・大型積み木・折り紙・あやとりで、一人がはじめると他の子もやり始める。登園してもみんなが何もしないで立っていることもあった状態から、不十分ではあるが自発的に遊べるようになってきた。園児数8名の時の自由あそびと比べてみると、どうしても人数的に広がらないという思いがする。

### 2. 絵画製作面について

別々に離れてかく、用具を個々が違うものを使うことにより、友だちの真似、友だちを気にしないで、自分なりに表現するようになる。

### 3. 言語面について

「私も」「同じ」など、友だちと同じことを言うことが多いので、自分の生活経験（家族・好きな食べ物など）自分のことに関する発表、絵をかいてからのお話づくりなど、友だちと同じにならない課題を与える。

月曜日には、休みの日について、あそんだこと、手伝ったこと等の生活発表をする。

### 4. その他について

- 皮膚を鍛える、忍耐力を目的にはだかマラソンを行なう。寒くなってからは、下着だけで暖い時間に行なう。
- 冬期になって、なわとび・ボールつきの回数表をつける。これは、自分のできた数だけ○印をはっていく。次の時に前より増えている数だけはる。目標に向かってするように言わなくても、子ども達が進んで自分なりに取りくんでいっている。
- 豊同教就学前部会の取り組みとして、扁平足矯正のための竹ふみを行なう。
- 毎週木曜日に絵本の貸し出しをし、読める子もいるが、子どもだけだと字をただ読む



というだけで内容までつかむことができないので、家の人と一緒に読んでもらうよう話をしている。また、幼稚園で読み聞かせた絵本を貸りる傾向があるので、子ども達に読んでもらいたい本を週に2, 3冊は読み聞かせるようにしている。

○多人数でないといけないあそび, 例えばゲーム・円形ドッチの経験と集団生活, 集団行動の経験と大きな集団の中に入っても, のびのびと活動できること等をねらいで週1回程度, 久比幼稚園との合同保育を行なっている。

### 保育指導案

豊町立沖友幼稚園

指導者 池内文子

1. 日時 昭和59年10月26日
2. 組名 年長児(男子3名 女子3名)  
年少児(女子3名)
3. 主題 おみせやさんごっこをしよう。
4. ねらい ○おみせやさんの品物を工夫してつくろう。  
○みんなで仲よくおみせやさんごっこをする。

時間	幼児の活動	指導上の留意点
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○買い物をした時のことについて話し合う。</li> <li>○近くのお店に自分の好きな, みんなで分けることのできるお菓子を買いに行く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○話し合いの中で, 買い時の言葉をはっきりと身につけさせる。</li> <li>○きちんと買い物ができるよう見守りながら, 必要な助言を与えるようにする。</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○昨日した買い物について話し合う。</li> <li>○何屋さんにするか話し合う。</li> <li>○自分の好きなお菓子をつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○昨日した買い物について話し合わせる中で, おみせやさんごっこをしようという気持ちを起こさせる。</li> <li>○つくろうとする意欲が増すように色々な材料を準備しておく。</li> </ul>

1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○店づくりの材料, 装飾等について話し合う。</li> <li>○ダンボール箱, 模造紙, 机等を使ってお店づくりをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○必要なものやお店づくりについての考えや思いがみんなからでるよう助言する。</li> <li>○年長児と年少児が協力してお店づくりができるよう助言する。</li> </ul>
2 本時 ½	<ul style="list-style-type: none"> <li>○あき箱, 包み紙, 自然物を使って, 人形・首かざり・カバン・車など, おもちゃやさんにあるものをつくる。</li> <li>○品物ならべをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「喜んで 買ってもらえる品物」という助言を与えて, 工夫したり, ていねいにつくるように努力させる。</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○お店, 品物について宣伝をする。</li> <li>○おかあさん達に買い手になってもらい, おみせやさんごっこをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大きな声ではっきりと言えるよう助言を与える。</li> <li>○簡単な言葉のやりとりだけでなく, 品物についての話ができるよう助言する。</li> </ul>

## —絵本・童話の貸し出しを通して—

(本の楽しさがわかる子どもに)

大浜幼稚園 国 広 澄 枝

### 1. はじめに

幼稚園における経験や活動の一つに絵本や童話がある。1983年5月～1984年7月の間の6名の幼児(男児3名, 女児3名)についての図書貸し出し活動を通して, 保育を考えてみた。

### 2. ねらい

絵本・童話の教育的意義は

- ① ことばを豊かにし認識を育てる。
- ② 空想力を養い, イメージを広げる。
- ③ 情緒の発達を促し, 豊かな情操を養う。
- ④ 美的なセンスと感受性を育てる。
- ⑤ 経験を広げ, 知識を与える。
- ⑥ 知的好奇心や科学性の芽ばえを育てる。
- ⑦ 読書生活の基礎を養う。

があげられますが, まず楽しみ, それによって本好きにさせることを第一の目標として取り組んできた。

### 3. 内 容

毎週土曜日に自分で借りたい本を一冊選ばせ, 手下げ袋に入れて持ち帰らせ, 月曜日に返させる。本のおもしろさは, 幼児自身には努力のいる文字読みから体得されるものではなく, 絵を見ながら, 大人から聴く話を通じて生まれてくる。そして, そのおもしろさを知るとともに, 読む力がついてくるので懇談会等で母親にそのことをよくお願いしている。返却日にどなたに読んでいただいたのか聞くと, 圧倒的に母親が多く, 続いて祖父母・兄弟・本人・父の順位であった。持ち帰った本に対する子ども達の反応について「何回も何回も読んでもらいたがる」「ある場面がとっても好きでそこをじっと見ている」などと言った母親の話をよく耳にする。また子ども達は一回ではなくて家族全員に「5回も6回も読んでもらった」とうれしそうに報告してくれている。本を楽しむ心が子ども達の中に少しずつ育っていていることをうれしく思っている。

昨年度の結果でみると, 一人平均53冊借りており, 傾向として次のようなことがわかった。

- ① 一度誰かに読んでもらった本(教師の場合が多い)や前にみたことのある本を借りていることが多く, 経験の乏しい一学期は特にこの傾向が強いようである。男児で「しょうほうじどうしゃじぶた」を4回続けて借りたり, 女児では「もじゃもじゃ」を3回続けて借りている。
- ② 自分達が実際に経験したこと「千羽づるのねがい」生活の中で, 現実の生活とピッタリの本「どうしたのだいちゃん」または現実の生活にはないけれども, 欲しい, やってみたいという本「はらべこのとこやさん」「うそつきテンポ」「そらいろのたね」を多く借りていた。

③男の子の場合は、動物・乗物・科学の本、冒険心をそそる絵本「かえるやとかげのなかま」「きょうりゅう」「いろいろなひこうき」「かみひこうき」「ぐりとぐらのかいすいよく」を借り、女の子の場合は、食べ物・かわいい動物のでてくる話・かわいそうな話の本「ぼくのばんわたしのばん」「ありがとうくまくん」「ぐりとぐら」「ピッキーとポッキー」を多く借りていた。

#### 4. おわりに

○テレビっ子といわれる現代の子ども達に働きかけるのは幼稚園ばかりではなく、むしろ読書習慣の基礎を養うために、ひとりひとりの子どもを見守る母親の指導が大切である。家庭生活の中でこそ絵本・童話という図書の位置づけが大切であると思うので、今後そのことを母親にお願いしていきたい。

○入園当初は教師と幼児の触れ合いを深めるために、絵本・童話を手がかりとして出発し、その後は、そのときどきの状況によっているので、よい絵本の選択、その与え方と工夫、さらには個人差への配慮等を考えて、豊かな心をもった子どもを育てるようにしたい。

テーマ 遊びの中で経験を通していきいきと活動できる保育を考える。

— 自由遊びをいきいきとした活動と捉えて —

##### 1. 一日の保育の流れについて

登園時から約1時間(8:00~9:00)を自由遊びにしている。(早い子どもは7時過ぎから登園している)かたづけ・手洗い・排尿をし、学級としてまとまった活動にはっていく。約1時間30分まとまった活動(教師の発想になる活動)の中で 集団の中の一人として打ち込んだあと、11時より給食の準備をし、11時30分頃より12時頃まで給食の時間としている。給食が終ると、だいたい1時間程保育室より外に出て自由遊び、掃除をすまし入室して静かにお話を聞いたり、歌をうたったり、明日の連絡事項等をして2時頃降園する。これが一日の流れのおおまかなものだが、幼児の状態、その日その日の計画などによって、時間的にはかわるし、また朝からまとまった活動にはいることもある。

##### 2. 吾が園の自由遊びの実態

子どもにとって遊びは「生活であり、生命である」したがって充実した子ども時代をもつためには子どもは思い存分いきいきと遊ばなくてはならない。このことは教師もよく理解しているが、新築4年目の吾が園は、小学校と共有の固定遊具(すべり台・ブランコ・雲梯・つり輪・鉄棒・スーパージム・ジャングルジム・シーソー・登り棒・オーシャン)があり、申訳程度の砂場があるだけで環境はよくない。

また純農村で自然には恵まれているが近くに雑草が生い茂り、小石がごろごろし、木片があったり、古タイヤ、うす汚れた場所、登って遊べる木等子ども達にとっての本当の遊び場がない。

子ども達はそれら自然物を使い創意工夫して物を作ったり、泥まみれになって遊んでいる姿をめったに見ることがなくなった。また教師の私も怪我をさせないように、保育室でブロック折紙・ままごと・本読み等自由遊びの時間にしておれば安心し、子ども達もみずから選んだ遊

びなので楽しさは感じているのだろうが、自由に遊ばせているようでも教師の眼が光っている。遊びからは心の底から「ああおもしろかった。あしたもしたいね」と力いっぱい、忍耐づよく身体が疲れるまで真剣に遊んでいないと反省させられる毎日である。

だが子ども達のかわいい瞳が誰はばかりことなく自分を出し切って遊んだことがある。

①春の遠足、秋の木の実拾いにダムによく行く。その途中にまさ土の露出した山肌があり、丁度登り切ったところでそこは安全な所なのでよく休んだり、お弁当を食べる。その後誰からともなくその山に登り、お尻からすべっておりてくる遊びを発見していた。一人の子どもがすると「ほくも、わたしも」と誰が一番高い所に登れるか競争し、すべっておりて来る時の顔は真剣で、少しの傷などへいちゃらでズボンや下着は汚れに汚れ、破れそうになった子どももいたが満足感で一杯の顔をしていた。

②近くの山に登った時のこと。みんなで探検ごっこなどで遊んだ。少し疲れ、大きな山桃の木の下で休んでいたその時、今度はこの木にみんなで登ってみようと言うことになった。

木をざわざわとゆする子。大きな声を出して叫ぶ子。ぶらさがる子などその姿はさまざまであった。みんな真っ赤な顔をしていた。私が「もうやめよう」と言っても「まだしたい。もうちょっと」と言ってなかなか下りて来なかった。私はこのような遊びによって子ども達が人間らしい人間に成長するのではないだろうかと思った。

### 3. おわりに

幼稚園における自由遊びの時間は、『人間本来の探索行動であり、将来の人間形成にはなくてはならない「遊び」を、幼児みずからが選んで独立独歩して行なり大へん重要な意味をもつ時間』であり、その遊びは、きびしい、真剣な、そして楽しいものである。

教師はどのようにして真の遊びを子どもから引き出すか、そのため「どのような環境を設定し」遊びを望ましく発展させるために、「どのような指導助言をするか。」これが教師の役割としてたいせつなことであると思う。

保育指導案

指導者 国 広 澄 枝

1. 日 時 1984年10月26日(金)
2. 組 名 赤組(4歳児) 男児4名 女児2名  
青組(5歳児) 男児3名 女児3名 } 計 12名
3. 主 題 お話づくり
4. 目 標 ○自分の思ったことをいいながら、お話をつくる。  
○友だちにわかるように話し、友だちの話を静かに聞く。
5. 保育計画

	保 育 の 活 動	ね ら い	日数
1	○木の葉や木の実を拾いに行く。	○秋の自然に親しませ、自然の変化に気づかせる。	1日
2	○拾ってきた木の葉、木の実で数をかぞえたり、ままごとをしたり、どんぐり人形を削ったり、いろいろな遊びをする。	○自由に使わせて遊びながら、いろいろなことがらに気づかせる。	3日
3.	○美しい木の葉の絵を描いたり、絵画表現を楽しむ。 転写遊び こすり出し もよう作り 動物の形作り } で遊ぶ。	○身近にある自然物の形や色に気づき喜んで表現させる。 ○模様風な表現にも興味をもって、形や色の取り合わせを自由にいろいろ試みるようにさせる。	4日
4	○お話づくりをする。	○一人ひとりの話しことばを大切にする。	2日
5	○自分の作ったお話をみんなの前で話す。	○みんなの前でも、気楽に話せるように自信をもたせる。	本時 ½日

⑨ 時間を日数で書いたのは、幼児の活動を一日の流れとして捉えたためです。

## 遊びの中でいきいきと活動する子供

豊島幼稚園

### (1) 豊島幼稚園の概要

### (2) 園児の実態

半農・半漁の豊島では漁業家庭に他ではあまり見受けられない家庭事情を持つ園児が多い。両親が長期出漁のため養護施設の豊浜学寮から通園したり、祖父母・兄弟と生活している。入園前は両親と共に船上生活をし、狭い船室で一人遊びを余儀なくされ、生活も不規則であった。歯みがき・手洗い・排泄・挨拶等の基本的な生活習慣がほとんど身につかず、語い量も少ない。少人数集団で生活していたので社会性に欠け、集団生活になじみにくい。

### (3) 取り組み

基本的な生活習慣の確立を重点目標におき、付随して社会性を身につけることを目標に取り組んできた。又、今年度から早期教育を目的に3才児保育を開始、現在、3.4才児混合、5才児単独の4クラス編成。3.4才児を早く集団生活にとけこませると共に、5才児の情緒面を安定させるために、週2回、合同保育を実施し、全園児の交流を図っている。

合同保育では講堂を利用し、リズム遊び・球技・マットや平均台等を使って運動、自由遊びをし、皆で半日過ごすようにしている。公開授業はその中のリズム遊びの一部を披露している。

### (4) 園児の好む遊び

室内遊び（ままごと・粘土・折紙・イス取りゲーム・ジャンケンゲーム・トランポリン……）

屋外遊び（乗物遊び・ジャングルジム・砂遊び・水浴び・サッカー・散歩・宝探し・リレー）

### (5) その他の取り組み

5才児は春に安佐動物園見学、合同で春・秋、2回島内遠足、貝拾い、ススキ狩り、落葉拾い等に各々園外保育をしている。

花壇や菜園がないのでプランターで稲作りをしたり、園児に一鉢づつチューリップ・水仙・アスター等の花を育てさせている。

家族との交流を深めると共に情操教育を目的に毎週土曜日、図書の貸し出しをしている。

成長期の園児の食生活を安定させ、偏食矯正を図るため給食指導をしている。

交通道徳を守らせることと、危険防止のため、家庭の近くまで毎日、見送りをしている。

### (6) 今後の課題



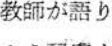
※ 以上は総べてスライドを使用して提案します。

保育指導案

豊浜町立豊島幼稚園

指導者 新開 菊美

1. 日時 昭和59年10月26日
2. 組名 桃組(3才児) 男子3名 女子8名 } 合計 19名  
           (4才児) 男子5名 女子3名
3. 主題 リズムで遊ぼう。
4. わらい リズムで遊びながら集中力を養い、感覚的なからだの基礎づくりをする。
5. 保育計画

時間	幼 児 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
2	ピアノに合わせて即時反応をする。 合図があったら握手する。 合図があったら手で頭を叩く。 合図があったら手で鼻をつまむ。 合図があったら手で「お星さまキラキラ」	○  曲に合わせて歩いたり走ったりリズムカルに遊ぶよう配慮する。
2	みんなの知っている動物になって即時反応をする。	○  のリズムを適宜に変えて歩いたり走ったり楽しく遊ばせるよう助言する。
本時	ジャックと豆の木 足音を表現しながら遊ぶ。	○ 遊ぶ前に物語りを聞かせ、表現しやすい場面を教師が語り、  の足音を表現して遊ぶよう配慮する。

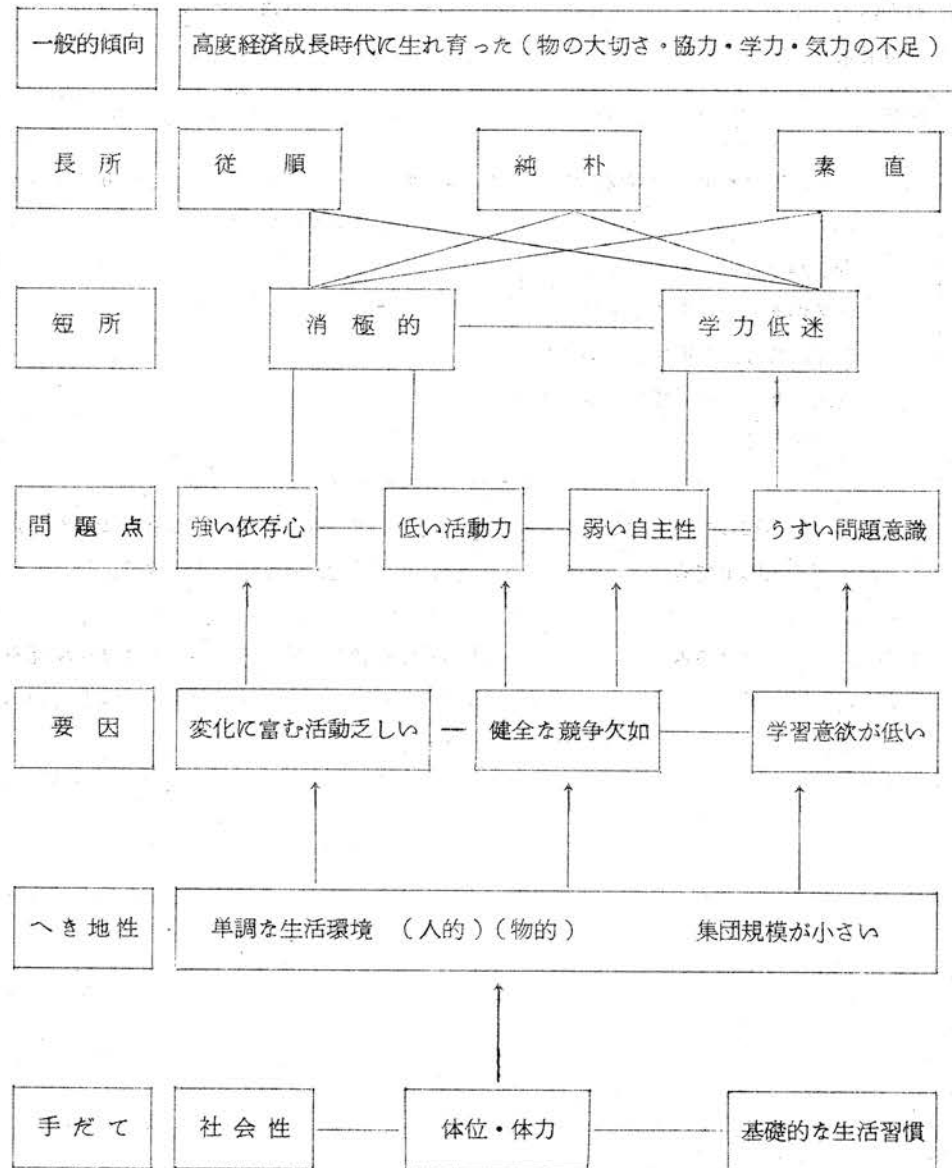


第3分科会 「複式教育のあり方」

推進協 沖友小学校 惣明修市

はじめに

高度経済成長時代にはぐくまれた物の使い捨て、非協力、学力偏重、加えて無気力という一般的全国的な傾向を下敷にして、へき地のよさと悪さを兼ね具えた子どもに対して、何をしなければならぬかということが提案の骨子となります。



1. 小規模複式学級の問題点

授業・教材・生活面など。

2. 児童活動のあらし

児童会・祭りばやし・生産活動・清掃・週行事・学校行事など。

3. 体力づくり

業間体育・全校体育など。

地域の教育課題

島という交通不便な地域に住む子どもは、生活環境が限られ、他地域へ行くにも、自転車で20分位走らないと交流できにくく、何かにつけ必要な要素が備わりにくい条件下にある。加えて、少人数なのでお互いが親密感が強く、言語表現にたよらなくても、意思が通じるため言語力がたかまりにくい。子どもたちは、自ら学ぼうというよりも、教師が教えてくれるものだという気持ちが高い。そこで正しい生活習慣を身につけさせ、学習をより多様化し、創造的な思考力や自己表現のできる力を定着させなければならない。

まず、第一に、基本的な社会性を身につけさせるために、他人との出会いを大切にし、地域ぐるみで気持ちのよい挨拶ができるように習慣化を図る。第二に、日常の言語活動を通して、正しい言葉の使い方を習得し、人前で自分の考えをはっきり述べることのできる表現力を身につけさせる。第三に、思考力・実践力をつけるために、身のまわりの不合理矛盾に気づき、その原因をさぐり、将来を見通し、課題をもって追求できる力を養う。第四に、生命を尊び、お互いを認め合い、協力して新しいものを築いていく人間関係を育てる。

このことを達成する原動力はたくましい体力・体位であり、やりぬく気力と意志が基盤となる。

以上を本校の教育課題として、その具体化と実践に努力している。

### 第3分科会 「複式教育のあり方」

推進協 大浜小学校 広近先子

#### 1. 複式学級における授業改善の方向性はいかにあるべきか

まず授業改善ということ、どう観ていくか、どのような側面で考えようとしているのかが課題となる。私達が複式学級における授業改善といっているのは、人間関係を基盤とした教育のあり方という、いわば今日的な社会現象に観られる困惑な問題に迫る方向として考えようとしているわけである。又このことを郷土という観点から観ると、本校は複式学級という学級構成を余儀なくしている。複式学級は過疎化の産物であるが過疎化の産物であるが故に地域に対応する教育が考えられなければならないと考える。人間疎外に追いやられる現状がこの地域にあるとするならば、その現実を直視した教育の営みが考えられてしかるべきであると思う。少なくともそういった意味で人間関係を基盤を置いた複式授業の改善であるということがご理解いただけたものと思っている。

#### 2. 児童が学習の主体者になるためには

毎年のようにスタッフが入れ代わる本校では、なかなか学習の深まりを感じることはできない面もあるが、それなりに学習を進めていくパターンが必要である。初めて複式をもち、初めてバズ学習に接する職員が容易に溶け込めるスタイルと低中高の児童の発達段階にそって単元を見通す学習態度のパターンがプログラムに位置づけられなければならないと考える。

そこで低学年（複式）の場合を考えてみると、まず単元の下位目標に位置づく学習内容をカードに記し、どんな学習かを教師が説明する。その後どんな学習がしてみたいかを児童に尋ねて意見を聞く。学習内容カードには具体物が表示してあるので児童は操作活動のできる学習に興味を示す。ところで学習内容カードには学習順序が記入していないので、どういった順序で学習するかを児童は教科書をみながら操作活動の時間を続けてカードに番号を記入していく。ここまでの時間が45分を要するので複式の場合はメラン案のプログラムを作成している。低学年の単元見通しについては別紙プリントによって説明する予定である。

中学年は本年度は単式学級で中学年の初めての試みとして次のような学習を展開した。最初にブリテストを実施する。ブリテストの右上に◎じるしをし、学習内容のポイントを記入し自分達で計画を立てる指針とする。又ブリテストの結果をみて児童はどの部分ができていなかったかが理解できる。更にSP分析表を作成してそれを子供に提供することによって学級の実態が児童自身にもわかり、学級全体の傾向が理解できる。従って児童が計画表を作成していく資料として教科書・ブリテスト・SP分析表をみながら学習計画を立てていく一つのパターンを習得していくことができる。（詳細については大会要項参照のこと）

次に高学年であるが、5・6年は複式学級である。この学年では教科書やワークブック（問題集）により児童が学習計画を立て、それぞれの学習計画表に記入する。このカードは自己評価活動としての側面を兼ね備えたもので次の通りである。

## 算数科学習計画表

年 番 ( )

## 単元 4. 量のいろいろなはかり方

時数	問 題	評価	つ ぶ や き
1	ブリテスト 学習計画を立てる。	△	ひとつもわからないと思ったが、だいぶやってみた。
2	P 40と41 ①平均	◎	平均をもとめる式がよくわかった。
3	P 41の3と4 合計をして平均をもとめる。	◎	プリントがよくわかった。
4	P 43	○	あるくはばの平均の出し方がわかった。

## 以下省略

この学習計画表の使用としては、学習内容がよく理解された時は◎、大体理解できた時は○もう少し理解ができない時は△、理解できなかった時は×、と記号で評価の欄に書き込み、又つぶやきの欄には、ここがよくわからなかったとか、ここまではわかったがここところがよくわからなかったなどと記入するようにしている。

本時の学習で教師は、どの児童がよくわかっていないとか、学級全体でどのくらいの児童が理解していないとかを把握するために授業終了後カードを提出させる。その結果をみて次時の授業の進め方や学習計画をコントロールするわけであるが現在、児童達でこれらの調整を行っていない。その理由は、学習計画の練り直しをする時間の問題について危惧するわけであるが案外、思い切って学習計画の練り直しの時間をとれば、学習計画立案の能力とコミュニケーションというか、全体の立場に立った話し合い活動の場が持てるので、むしろ本校の授業改善の視点となっている人間関係を基盤にした教育へのアプローチとなるのではないかと考える。

以上単元見通しについての本校におけるささやかな歩みであるが今後次のような課題を抱えている。

1. 児童はブリテストに対して「できないもの」として学習に対する興味と意欲を喪失させる結果にはならないかという教師側の心配を他所に既習の学力をフルに生かして、その問題に取り組もうとする姿勢が見受けられる。然し全く新しい知識、理解を要する単元には歯が立たないといった感じである。

2. 能力差のある少人数学級では児童の中に、教えるもの、教えられるものというように位置づけが固定化される。従って教えてもらうという受身の形でなくて「ここがわからないのでどう考えたらよいか」と自ら求める学習態度を重視していきたい。
  3. 人間関係を重視するバズ学習では、子供同志の働きかけができ、今まで理解に苦しんでいた児童もやっとできたという満足感が持てるようになり、クラスの支えで今まで発表しなかった児童が発表しようとするようになった。しかし尙課題は残る。
  4. 複式学級での間接授業には教師が与えた課題学習以外に児童の自主性が要求されるので間接授業の場をどう生かすかということにウエイトを置いた授業研究を進めていきたい。
  5. その他、低学力に追いやられている児童への働きかけとか、児童の自主性を十分に生かしてきていないという実態がある。このことは、きめ細かな学習がなされていないということであって授業という学習実践の中で課題を克服していきたい。
3. 集合指導について

全国へき地教育研究会の発表内容の中で、小規模校がいくつか集まって教育活動を行った結果、教育効果が得られたということにヒントをえて昭和55年度より第1回の集合指導が実施された。斎小学校が大浜小学校との集合指導を考えたのは、開始当時1名しかいなかった児童（第5学年女兒）が大規模校には適応しにくい面があるという判断であった。かけ離れた規模の学校では、大集団に埋没されやすいので、自分が集団の中で力を発揮したり、集団から認められやすい規模との集合指導を望んだのではあるが、豊島小学校からの転入児の保護者は豊島小学校との集合指導を望む気持は今もある。

(1) 集合指導の実施状況

（昭和55年度）

○週1回

5月12日より実施

（昭和56年度）

○週1回毎週火曜日 4月14日より実施

○9月27日 合同運動会

○3月7日 大浜小学習発表会見学

（昭和57年度）

○5月17日より1週間

○9月10日より10日間

○9月26日 合同運動会

○10月11日 合同遠足（瀬戸田）

○12月1日より6日間

○2月6日 大浜小学校学習発表会見学

（昭和58年度）

○6月21日より6日間

- 9月22日より7日間 この回から別船使用を中止して同栄丸で通学
- 10月2日 合同運動会 保護者も参加
- 2月2日 合同学習発表会 予行参加
- 2月5日 合同学習発表会

(2) 昭和59年度 集合指導計画 豊浜町立齋小学校 (昭59.5.21)

1. 目的

学級の極少人数化からくる問題点を克服し、より望ましい学校生活を体験させながら学力の向上をめざし、学習意欲と実践力を培う。

- より大きな集団内での生活により、集団思考や集団行動のしかたを身につけさせ、調和のとれた人間形成をめざす。
- 広い友人関係をつくり、将来への期待感を持たせると共に、幅のある人間観を育てる。
- 集団によってたかまりが期待し得る学習の経験をさせる。
- 平素の単調になりがちな生活に節をつくり、活力ある学校生活をおくらせる。

2. 場所 大浜小学校

3. 実施時期

○ 第1回(第1学期)

通常の学校生活に参加する。

6月7日(木)～13日(水)……………6日間

この間に、スポーツテストを実施し、最後の日にはお楽しみ会等を行なう。

○ 第2回(第2学期)

運動会に参加する。9月30日(日)

大浜小学校の練習開始に合わせて出向く。

全国バズ学習研究大会に参加する。10月26日(金)、27日(土)

○ 第3回(第3学期)

学習発表会に参加する。2月3日(日) 練習は齋小で行い、予行と当日出向く。

○ 修学旅行 合流

○ 参加学年及び児童氏名

第6学年 西岡清香, 第3学年 西岡浩子, 第2学年 北瀬奉文・西岡豊美 計4名

以下省略

後記

齋小とは島と島という悪条件を克服して集合指導に踏み切っている。極少人数のために得られない集団思考の経験を獲得するために多くのものを犠牲にしている。齋小の勇断に対して敬意を表しながら、この稿を終えたい。

第4A分科会 「やる気を育てる授業改善」

— 国語を中心に —

推進協 豊小学校 坂本卓夫

1. はじめに

従来、学校で一般に行われて来た学力評価・成績評価の形態は、いわゆる相対評価と呼ばれるものではないかと思えます。児童の学習結果をテストによって測定し、学級や学校での他の児童との相対的位置関係を定める相対評価は、児童に序列をつけ格付けをし、不当な競争主義をあり、児童の主体的な学習への意欲を失わせる結果を招いていることは否定できません。

しかも、機能的には、学期や学年の終わりに行われる総括的な評価が一般的であって、指導前・中・後の評価という観点が抜けているように思われます。

児童のやる気を育て、学習の効果を高めていくためには、どのように評価を生かしていくかという点からみると、従来の形態としての相対評価や機能としての総括的な評価は、きわめて多くの問題を含んでいると言えます。どちらも、教師による一面的な学習結果の測定におわり、学習の調整機能を十分に果たしていないと言えます。

このような評価に対する新しい評価法として、形態としての到達度評価、機能としての形成的評価が提唱されています。到達度評価とは「外的客観的に設定された到達目標・到達基準に照らした評価」であり、形成的評価とは「教育活動が進展していく途上において、当面の目標に対する到達度や学習状況などを把握し、それを教育活動の軌道修正や指導の方向づけをし、指導を適切、かつ効果的なものにする評価」です。

本校では、やる気を育てる授業改善の一つの試みとして、評価においては、到達度評価・形成的評価を行なっています。又、学習の見通しを立て、学習課題をよりたしかなものにするために、課題設定までの手順を次のようにして作成しています。

2. フローチャートによる指導案 (1年……「たぬきの糸車」)

教授 = 学習過程

時間	学習内容	指導過程(フローチャート)	教材・教具・留意点
	[導入] 1. 1の場面 の音読 ① 2. おかみさ んのたぬき への気持ち R② ③	<pre>                     graph TD                         A(はじめ) --- B[1の場面を読む]                     </pre>	○登場人物の気持ちが生じる背景にある状況を頭に描かせて読ませたいので、1の場面の絵を正面へ掲示しておく。

5分

〔評価1〕

おかみさんは、たぬきについて、どんな気持ちだったか。

①

①

YES

NO

補足

おかみさんの気持ちがわかったか

学習のめあて

3. 本時の目標

○おかみさんがたぬきに対してマイナスの反応を示していれば許容範囲とする。

○きこりがたぬきを捕えるために、わなを仕掛けた部分とのかかわりの中で、おかみさんの気持ちを読みとらせたい。  
○授業に参加しにくい子を指名したい。

○学習のめあてを小黒板に書いて終了まで端に掲示。

⑤

〔展開〕

1. 2の場面の音読

④

2. 2の場面の情景と様子

⑤⑥⑦⑧⑨

〔評価2〕

2の場面を読む

どんな晩か

YES

補(さし本え文)

NO

晩の情景や様子がわかった

②

○本時の学習範囲を感情が表れるように斉読させる。

○月の切り絵を貼付し、情景を読みとらせたい。

○「月のきれいな晩」と指摘できても「糸をつむぐ音が聞こえる晩」については気づかないだろうから誘導尋問によりイメージ化させたい。

⑫



5分

3. おかみさんが、ふと気づいたこと。

⑩⑪⑫

ふと、どんなことに、おかみさんは気づいたか。

○ふと気付いたことが表れている叙述箇所サイドラインを引かせる。  
○引いたらA母を緑色にさせる。  
○隣席の者もできていたら答合わせをさせ、二人の意見が一致したら手をつないで立たせる。

4. おかみさんのたぬきへの気持ち

⑬⑭

[評価3]

おかみさんは、たぬきへどんな気持ちになったか

○おかみさんが、たぬきへ興味を示した心のゆらぎを読みとらせたい。

⑰

5. おかみさんに見えた様子

⑮

おかみさんがよく見るとどんな様子が見えてきたか。

○たぬきの様子がわかる所へ赤鉛筆でサイドラインを引かせる。  
○引かせたらA母を緑色にさせる。

12分

6. おかみさんとたぬきの動作化

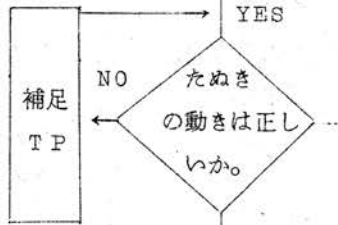
⑯

[評価4]

おかみさんとたぬきになってやってみよう。

③  
③

○隣席の者もできていたら答え合わせをさせる。  
○動作化へ発展させたいのでHPを投影して斉読させる。



○隣席の者と動作させ、二人の行動と心理の掛け合いを体で感じとらせたい。  
○子供達の動きが叙述に即しているか見させたい。  
○糸車をまわすおかみさんのスピードにあった目の動きや糸車を回す動作をたぬきがしているか注目させたい。

略

### 3. 課題設定までの手順及び課題の設定のしかた

今、私たちの授業をふりかえってみる時、一時間の学習を次時の学習へとつなぎ、発展させることをなおざりにしている傾向がないとは言えません。本時で獲得した知識・技能や、ゆさぶられた知的好奇心が、その時、その場だけにとどまらず、次の自主的・主体的な学習に発展するために、次時の学習課題を明確にすることは、とりわけ大切なことだと思います。ただ、次時の学習課題を明確にするには、本時の学習課題が明らかでなければなりません。本時の目標が何であったか、その目的はどのように達成されたかを、教師ばかりでなく、児童がはっきりと認識することが、次時の課題を明らかにする出発点です。

次時の課題を明らかにするために、一般に多くの授業では、終了時に次時の予告をするという形がとられます。ここで教師は、児童に学習すべき目標を明らかにし、課題意識をもたせ、意欲的・自主的な学習活動を起こさせるための手だてを具体的に提示します。

次時の課題は、これまで学習して来た内容を確認して定着させ、次の課題への関連づけをし、学習を容易にさせ、展望を与えるものであるべきだと思います。そうすれば、児童は本時で得た達成感をバネに、新しい課題に立ち向かい、自ら学習する意欲をもち、学習を発展させていきます。こうして次時へのレディネスが十分にできあがった時、次時の授業は生き生きとした活動の場になり、この繰り返しによって児童は自ら学び、自ら課題を解決していく習慣を形成することになります。

本校の課題設定までの手順を、1年「たぬきの糸車」を素材にして次に述べます。

#### 「たぬきの糸車」の課題設定までの手順

**主題** 伊豆地方の風土の中で生まれ、語り継がれて来た民話である。いたずらだが憎めないたぬきと人のよいおかみさんの温かい交流の姿が美しい伊豆の山中を背景に描かれている。

#### 単元の目標

- (認知的) ○人物の動作や表情などに気を付け、場面の様子を想像しながら読むことができるようにする。
- 人物の様子のよく分かる所を視写し、かわいらしい様子の書き表し方に気付くことができるようにする。
- 読み方や意味の分からない文字・語句に注意して文章を読み取ることができるようにする。
- (態度的) ○登場人物の動作や表情を思い描きながら音読しようとする。
- 自分の考えを大きな声で話そうとする。

場面	ページ	内容と大事にしたい文	課題と主な発問
1	P 24 L 1 P 25 L 1	山奥のきこり夫婦の暮らしと、 たぬきのいたずら。	きこり夫婦とたぬきは毎日どんな気持で暮らしていたのですか。

		<p>○山おくに、きこりのふうふがすんでいました。</p> <p>○一けんやなので、まいばんのようにたぬきがやってきて、いたずらをしました。</p> <p>○きこりは、わなをしかけました。</p>	<p>問1. きこり夫婦はどんな所に住んでいたでしょう。</p> <p>問2. たぬきは、どうして毎晩のようによくやって来たのでしょうか。</p> <p>問3. きこりは、なぜわなを仕掛けたのでしょうか。</p>
2	P 25 L2   P 28 L8	<p>素朴なおかみさんの人柄とたぬきの心の通い合い</p> <p>○ある月のきれいな晩のこと、おかみさんは車をまわして糸をつむいでいました。</p> <p>○キーカラカラ…… キークルクル……</p> <p>○おかみさんは、たぬきをにがしてやりました。</p>	<p>たぬきと、おかみさんの気持ちはどのようになって行ったのでしょうか。</p> <p>問1. どんな夜でしょう。目に浮んでくる様子を話してください。</p> <p>問2. どんな音が聞こえて来るでしょう。</p> <p>問3. たぬきは、どうしていたでしょう。</p> <p>問4. おかみさんはなぜ助けたのでしょうか。</p>
3	P 28 L9   P 29 L2	<p>山の自然の変化によるきこり夫婦の生活場所の移動</p> <p>○ゆきがふりはじめるときこりのふうふは、村へおりていきました。</p>	<p>冬になると、きこり夫婦は、どうしましたか。</p> <p>問1. どうして二人は、村へおりていったのでしょうか。</p> <p>問2. たぬきは、どんな気持だったでしょう。</p>
4	P 29 L3   P 31 L3	<p>きこり夫婦のいない間に、たぬきのしたこと。</p> <p>○とをあけたとき、おかみさんはあっとおどろきました。</p>	<p>春になって、山奥の小屋に帰って来たおかみさんは何におどろいたのでしょうか。</p> <p>問1. おかみさんは、どうしておど</p>

			ろいたのでしょう。 問2. おかみさんの気持ちになって書き込みましょう。
5	P32L1 ) P32L9	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>おどりながら帰って行くたぬきと、それを見送るおかみさんの気持ち</p> </div> <p>○たぬきは、びよこんと外にとびおりました。そして、さもうれしくてたまらないように、びよんびよんおどりながら、かえっていきましたとさ。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>たぬきやおかみさんは、どんな気持ちだったでしょう。</p> </div> <p>問1. びよんびよんおどりながら帰って行くたぬきは、どんな気持ちだったでしょう。 問2. その姿を見て、おかみさんはどう思ったでしょう。</p>

#### 4. おわりに

これからの評価は、指導の過程における評価にもっと目を向けるべきだと思います。一時間の指導過程は、評価の過程であるともいえます。従って、何を・いつ・どのように評価するかを指導前に計画しておくことが大切です。そして、その評価は、すべての児童に「最低限の学力を保障する」という教育観に立った指導的な評価であるべきです。

第4B分科会 「やる気を育てる授業改善」

— 社会を中心に —

推進協 豊島小学校 山形 義晴

1. 研究の経過

- (1) 研究主題「進んで学び、考えて、行動できる子どもをめざして」

— ひとりひとりが課題をもって、仲間とともに学び行動し、ともに高まっていく子どもをめざして — (聞く—話す—考える—行動する)

- (2) 研究主題設定の理由

2. 研究の視点

- (1) 児童の相互作用をとおして、ひとりひとりをいかす学習指導

- ・学力にかかわらず、どの子どもも真剣にとりくむ学習
- ・考えを出し合い、確かめ合って、考えをかえていく学習
- ・高まろうとする意欲のある学級
- ・すみっこでひとりひとり残された子どものいない学級

- (2) 授業が成立するための基本的条件

- ・的確な学習内容の指示がなされているか。
- ・授業が児童ひとりひとりのものになっているか。
- ・教師と児童の間に望ましい信頼関係があるか。
- ・必要にして十分な児童の掌握、教室環境の整備がなされているか。

- (3) 授業の組み立てについて

- ・児童相互の話し合いに重点をおくが、話し合いをどこでさせたらよいか。
- ・児童が主体的に活動できる場の確保がなされているか。
- ・本時の目標を達成するための中心過程はどうか。
- ・そこにいたるための準備として、基礎的な事項を確実にしておく過程はどうか。
- ・目標の達成を確認し、次時への足がかりをつくる過程はどうか。

3. やる気を育てるために

- (1) やる気の根底となるもの
- (2) 社会科学習における児童の傾向性
- (3) パズ、単元見直し学習による学習過程

導入 プリテストの実施

学習課題の提示と児童との共同による学習計画

展開 課題へのとりくみ

課題の提示 → 各自でとりくむ(個人学習) → グループで情報交換(全体学習)

→ 教師による補助修正とまとめ → 各自またはグループで確認の学習

終結 教師の補足・修正とまとめ、児童たちの確認学習

## ポストテストの実施

### 必要に応じて補充指導

#### 4. 指導の実践例

##### (1) プリテスト・ポストテスト作成について

- ・単元を見通し，子どもの知識や経験を予想して
- ・資料を使って

##### (2) 学習課題の設定について

○子ども達が意欲をもっていきいきと主体的にとりくむ課題を求めて

- ・単元を見通して，班で話し合って自分達で課題を決める。
- ・子どものもっている知識や経験を大切にしたい課題
- ・考え方にずれを感じさせるもの — 思考の深まり

##### (3) 課題へのとりくみについて

- ・各 自 で — 課題のつかみにくい子に対する手だて
- ・グループで — 話し合いの進め方，全員で考え全員発言，対立意見・まちがいを大切に
- ・学級全体で — 各班から出された意見・考えをもとに，より深い思考を
- ・その時間の学習について思った事，わかった事をノートに書く

##### (4) 地域の問題をとり入れて — 自分たちの生活と結びつけた学習

○豊島のみかん作り

- ・資料集め — 役場や農家の人の話

○わたしたちの食料と日本の農業

- ・給食の中から農産物を見つける。

○豊島の漁業

- ・自分の家の漁業
- ・食べ物調べ
- ・たいの養殖
- ・豊島の漁業の特色と問題点，他地域との比較

#### 5. 今後の課題

第4C分科会 「やる気を育てる授業改善」

— 算数を中心に —

推進協 久比小学校 宮地 キヌ子

バズで学び育つ子どもたち

— 個の問いかけに応え、磨き合う学習集団づくり —

1. 本校の歩み

(1) 昭和58年度の研究と課題

(2) 児童数減少の中で

- ・少人数でのバズの必要性

2. 算数科とバズ

(1) 楽しい学習

- ・「先生、しゃべらないで」
- ・先ず、話す。
- ・人の意見を自分の思考の組み立てに

(2) 「個の問いかけに応え、磨き合う学習集団づくり」

- ・単元見通し学習へ

学習課題を持って

(3) バズする なかま

- ・言わない人がないように
- ・話し合いに参加して
- ・人間関係を高めつゝ

3. 学校生活とバズ

(1) 「おはよう バズ」「さようなら バズ」

- ・1日の生活をバズで

(2) 教育活動全領域で

・業間体育や児童会で

・相互に尊敬と信頼を

4. 今後の課題

・バズを通して生きる力

学習集団づくりでの個の確立と変容

学習活動の効率化と人間関係



1. 地域実態・教育課題

へき地は一般的な傾向として、他との交流が少なく、とかく閉鎖的・排他的で小さな社会から脱却しにくく、進取的気風に劣ると言われている。ある面では当地もその傾向を避けることはできない。このことは生徒の生活においても散見される。自分達だけでは活発に言動するが、研究会等では要ることも言えなくなるとか、他校との球技試合などで雰囲気にもまれ、平素の実力を発揮しえなくて終わることが度々ある。

本町はほとんどが柑橘栽培を主とする専業農家で、製品は優秀で市場での評価は高く、県下において、最も財政的に豊かな町だった。ところが40年代に入って、密柑の生産過剰のため、生産費を割る結果となり、その不振を打開するため、単作の密柑から雑柑へ切りかえ、ようやく生徒の目途がたちはじめた頃に襲った寒波は農家に壊滅的な打撃を与え、苦しい生活は更に苦しくなり、出稼ぎを余儀なくされ、父親の不在家庭が増えて、生徒指導に新たな問題を提起している。意識調査の項目の「あなたはこの島を出て生活をしたいと思いますか」の結果は次の通りである。

	1 年	2 年	3 年
是非出たい	38%	55%	60%
どちらでもよい	15%	25%	15%
出たいけど島にいる	14%	7%	8%
その他	33%	13%	17%

学年の相違はあるが、3年生の場合、島から出たいと答えたのは60%、過半数の者はこの島の将来への展望をなくしていると考えられる。わずか8%の者が跡継ぎを考えているだけで、出たいと希望する者が学年を追うごとに増加している事実には深刻な問題が潜んでいると受けとめざるを得ない。

〔生徒の実態〕

本校の生徒は比較的小となしく、消極的でやゝ気迫に欠けている。最近どこの生徒にも見られる一般的傾向かも知れないが、苦しさに耐える気力(がまん強さ)のない生徒が増えているような気がする。掃除や作業を嫌い、自分達ですゝんでという姿勢は余り見られない。

そのような生徒がいると「ぶっている」とか言って冷やかな眼で見られるためみんなと同じようなことしかしようとしない。

生徒一人ひとりと話してみると表面的に全く何もないような生徒ですら、それぞれが心の中に不安・悩みをもって苦しんでいることがわかる。本校での意識調査によると、学校生活が楽しいと答えたものが半数以上いるが、約20%は楽しくないと答えている。家庭や学校の中で常に満たされず、疎外されているものなど、いろいろな課題を抱えていることも事実である。

〔研究主題設定の理由〕

今年度の教育目標（重点課題）の一つに「バズ学習の深化充実により、自主・協同・創造の学校・学級づくりの中で、単元見通し学習法の実践的研究を推進する」をとりあげ、具体的な研究テーマとして「個と集団の質的向上をめざして」を設定してとりこんでいる。

バズ学習は相互援助であるといわれている。その相互援助とは、教える者と教えられる者が対等の立場で、よい考えをとりいれて自分のものをよりよくしていく、自分をより高めていくものである。換言すれば、人の考えを奪い合って自己実現し、自己の確立をめざしていくものであるといえる。そこには幅広い理解を求めて情報の正確な交換が必要であり、豊かな構想を求めて啓発が尊重され、他人への関心と理解が深められ、相互の保障が認められなくてはならない。

正しく対話ができる生徒とは、素直に自分をぶちまけて自分の考えを大切にし、整理して順序よく話す生徒であり、他人の考えを大切にし、自分のこととし聞くことのできる者のことである。

創造力を高めるといことは、個々のもつ可能性・適性そのものを目的をもって内容のあるお互いの話しあいや活動を通じての過程を大切にし、その相互作用によって高めあうことである。

この作用がすなわち創造力を高めることと捉えている。

単元見通し学習とは「単元を通してのプリテスト → 単元を見通しての内容説明 → 課題提示と自主的・協同的解決活動 → まとめ → ポストテスト → 単元の補充強化」という一連の学習法である。（このことについては授業案を参照されたい）

## 2. テーマに迫る学級での取り組み

生徒の実態として、自分の意見を通し、他の意見を聞こうとしない自己中心的な所がある反面、話し合い等では、人の言動に左右されやすい生徒が多く、集団としてまとまりにくい傾向がみられる。

この実態をふまえた上で、4月当初、道徳・学活の年間計画をたて、これを軸として集団として高まっていこうとする力、差別・矛盾を指摘し、問題として提起できる人間を育成することを目指し、取り組みを進めてきた。ここでは、今までの取り組みの一例を述べてみたい。

### (1) クラス目標について

まず、自分たちのクラスはどういった目的を持って一年間共に伸びていくのかを自覚させるため生徒自身にクラス目標を話し合いによって考えさせ決定していった。

クラス目標	○明るいクラス
	○差別のないクラス — 相手の立場に立って考え、行動する。
	○何事も最後までくじけずやり通す

しかし、この時の話し合いの様子は、意見だけ述べるだけで、なぜこの目標がいいのか、また、反対意見の理由はなぜか、等の煮つめた話し合いではなく、ただ単に話し合いで決めたというだけのものになってしまった。

このクラス目標についての話し合いで、次のような課題が見い出されてきた。

① 話し合いのルールを身につけさせる。

・意見に対する理由づけをさせる。

② 集団の一員であることを自覚させる。

・発表の場を多くつくる。

・ひとりひとりが活動でき、個性が生かされるよう、活動内容を工夫する。

(2) 個人目標について

個人目標をたてさせるにあたっては、一人ひとりにクラスの一員であることを自覚させ、クラス目標に向って各自がどうしていかなければならないか、何ができるのかを考えさせていった。また掲示の方法も従来通りの短冊形式でなく、別のやり方を考えてみようという意見からクラス独自のものを工夫していった。そのことで、生徒は興味を持ち、意欲的な取り組みが行われた。

(3) 班新聞づくりについて

バズ学習において黙ったまま座っている生徒が多く、また逆に、自分の意志を押し通そうとする生徒もいる。このため集団としてのまとまりのつかない場面が多く見受けられた。このことから、班での作業を通し、一人ひとりが活動でき、個性が生かされる場面をつくり、班での連帯の意識を盛り上げるために、月一回、班での新聞づくりを行なってきた。班で内容を考え、構成・分担を決める。班員同志で協力して作る作業でお互いのアイディアを出し合い、批判し合い、修正するのであるが、始めた当初は雑誌等のコピー、アンケート形式、芸能関係の記事が多く、班の個性・独創性に欠けていたが、回を重ねるごとに、社会分野にも視野が広がり、取材活動も活発になってきている。

(4) 30分学活について

30分学活では、教科バズを中心に取り組みをすすめてきた。各教科の教科委員が中心となり、課題(問題)を提示し、その課題に一人ひとりが取り組む。数分後、班でバズをして、わからないところや、間違ったところを教え合う。この教科バズで、なかなか他の話し合いでは意見の出せなかったものが活発に意見を出すようになってきた。また、定期考査前には、各班で予想問題づくりを行ない、クラス全体で学習した。各教科の重要ポイントが明確化され、クラス全体で確認でき、学習の効果も上がってきているようである。

(5) 道徳・学活について

“まとまりができにくい集団”ということから、“集団とは何か”についての学習を深めていった。弱い者いじめ、仲間はずれ、等の実態がなぜなくなるのか、班ごとにバズをさせた。その大きな原因は、人と同じことをしていないと自分が逆の立場になるのではないかという危機感がそうさせていること、また仲間はずれなどの場面に出くわした時、これはおかしいと思いつつも、注意したり止めたりすると、まじめだと反対に非難されるから勇気がない、という意見が大半を占めていた。また、誰か犠牲になれば、自分が仲間はずれになることはないという弱い心があり、それが表われていたのだという本音の意見も出てきた。

これに関して、集団生活のルールについてふれていった。集団生活のルールを確立していくことは、弱い者の立場を理解し、支えていくことのみでなく、自分自身の人間性を高め、集団を高めていく道筋であるということを、自分たちの身近な事実を通して共に学んできた。

例えば、班ノートの中に「僕は学校がいやだ」という文があり、なぜいやか、どんなことがいやなのかといった内容は、書かれていなかった。しかし、この生徒にとっては、これだけのことを書くのが精一杯だったに違いない。この文をもとに、学級で学習を進めていった。なぜいやなのか、学校がきらいなのかを話し合いをしていくなかで、この文章を書いた生徒は、体が小さく、動作が遅いという理由で仲間から疎外されていたことが明らかになった。また、クラスの仲間は誰も助けることなく疎外する側にまわっているということであった。

もう一つの側は、皮膚疾患があり、このことが原因でクラスの仲間、学年の仲間から疎外されていた。班ノートの中に「A君がかわいそう」「いつもいつもいじめられている」などの提起があり、これを受けて、話し合いを行った。問題点を明らかにしていくなかで、A君は、疾患を自分自身がどんなに努力しても解決できないことであり、そのことで疎外されることは差別であるということに気づき、A君に対して、他のクラスから差別的な言動があれば、直ちにクラス全体の問題として解決にむけてやっというところになった。

こういった取り組みのなかで、班ノートに集団のあり方について自分たちのクラスの問題点が明確になった等の記述もみられ、自分たちの問題は自分たちで克服していこうという意識が芽生えはじめてきた。

### 3. 今後の課題

以上のように、個と集団の質的向上をめざすとくみ — 集団づくりは、部分的には成果を見たものの全体的には思う程進んでいないというのがいつわらざる実情である。

(1) バズ学習の基本的な訓練の場でもあると位置づけた本校の30分学活で、教科バズでは一定の前進を見た。しかし問題点をかなり残している。たとえば司会のし方では、みんなが自分の考えを出せるように配慮するとか、発言者を片寄らないようにするなど、こうした点でとまどいを見せている。話し合いで、だれかが意見を述べるとそれについて流れる傾向があり、活発な論議があまり見られない。話し合いのし方・ルールが今一步というところである。

このような欠陥を克服するために、バズ学習の基本的な訓練のねばり強い積み重ねを特に重視する必要がある。

(2) 生活行動についてのバズをしても、上記(1)と同じで、意見の出っぱなしとか、賛成・反対の理由に対する突っ込みがない。あっても弱い等なかなか話し合いになりにくい。

こうした状況を変えるための班ノートを活用しての集団づくりで、問題点を自分たちの力で解決していこうという意識が芽生え始めたことはささやかではあるが大きな成果であった。

このことに展望を持って、弱い者いじめ、なかまはずれなどの場に直面した時、き然としてそれを正し、あるいはまじめ人間という非難をはね返す人間になれるように指導を続けていくことが強く求められている。そうした克服なしには、目標とする集団づくりは考えられない。そのことが、まさに本校の集団づくりの重要な課題である。

## 第6分科会 「単元見通し学習による授業改善」

推進協 豊浜中学校 望月民雄

本校バズ学習 17年の歴史を支えてきたものは地域の実態、特性をぬきにしては生徒の変容が期待できない、という地域性重視の実践と伝統を継承することができたことである。昭和43年以来毎年1回は対外的な公開研究会を開催し年度末には実践研究誌をまとめてきた（現在14集）その間、全国的なバズ研究大会2回、文部省道徳教育、全国へき地教育の研究大会各1回、県単位の同和教育と体力づくり指定校発表の研究大会各1回、郡市単位の学校給食指導研究会2回、（学校給食指導で文部大臣賞）などを開催してきた。

バズ学習の取りくみとしても塩田芳久先生を中心に杉江・石田各先生の度重なる集中的ご指導によって当初の復習バズから町内バズへ、教科バズから単元単位の見通し学習つまり単元目標の設定から課題の系列化、さらにそれへの取り組ませ方に至る一連のモデル指導案づくりの段階にまで到達することができた。

### 1. 本年度の取り組み

単元見通し学習についての研修、バズ学習の理論・指導案づくりから研究授業による検証へと実践の方向づけをして校内研修を推進してきた。単元単位の学習目標を中心にすえた設計図を生徒に示すことで、生徒のみでなく教師も学習の目安が立て易いし学習効果の判定も容易である。しかし教材内容がいかにか精選されても、課題へ取り組ませるバズ技術というか学習技能訓練が不足していると効率的な学習にならないわけで、車の両輪として双方の研究が必要である。

#### (1) 研修内容の具体例

##### (1) 指導計画の要件について（単元見通しの意義、役割）

- 1) 達成目標を明確にする。
- 2) 目標達成にいたる方法を示す。（課題一覧表提示）
- 3) それに取り組ませる方法を取る。（とりくみの仕方）
- 4) 教師のまとめ（生徒による課題処理の点検と修正）

#### (2) 課題によるバズ学習の指導とは

教材研究の結果を適切な課題にまとめて指導する方法のことで、ここでいう課題とは、教師によって作成され、生徒がその解決に取り組むべき問題（仕事の内容）のことを意味する。生徒は、その課題を達成する過程において認知的・態度的なものを学びとることになる。

#### (3) プリテスト

プリテストは、その単元の学習に必要とされるレディネス的な問題項目から成るテストである。その単元の学習の出発点の状況を知って、特に力点をおいて指導すべき所、それほど時間をかけなくてもよい所などを明らかにし、指導計画に修正を加えることをねらいとするテスト即ち、学習課題の学習の結果として期待される知識・概念・理解・技能・能力などを測定するためのテストである。

#### (4) 校内研修

校内研修については、木曜日（第1週目を除く）を研修日に設定し、単元単位の学習指導案及び、学習技能訓練、特に、バズ場面の事例研究を校内授業研究を通して継続研究をしている。

- 5～7月の校内研修については、各自がつくった指導案について再検討、及び、1時間の細案をかき、課題にとりくませる方法（グループ・班・バズ）について研修
- 理科・数学科の校内授業研、3月上旬、指導案作りについて、塩田・杉江・石田各先生から指導を受け、その指導案をもとに公開研究会を行ない、指導を受けた。その時の評として教師が前面にまだまだ出すぎる。プリテストの意義・目的については、充分時間をかけて指導したらどうかという指導を受けた。
- 英語科・国語科の校内授業研究

## 2. 今後の課題

- ㊦ 単元見通し学習の指導案を書いてみて、今までいかにこまぎれの授業をやっていたかに気づいた。今学期は、1単元、4～5時間を単位にまず書いてとりくんだ。継続して研修を進めていくことは非常に努力を要するが、一般的指導案モデルを足がかりにして、豊浜中学校の生徒の実態に即した指導案づくりを深めていきたい。
- ㊧ 単元見通し学習にとりくむことにより、教師・生徒共に課題一覧表により、次のステップ（課題）の見通しができることから、家庭学習へのつながりを求めていきたい。
- ㊨ プリテストの実施により、生徒の既習内容・学力等の実態把握ができ、学習を進める上で、又内容の精選などに非常に良い。しかし1単元の見通しをたてる時点でおこなうプリテストが、その課題にどう組み込まれ、どう影響していくか、という点がまだかっちりしていないので、今後の研究課題の一つであると思っている。

### (二) 町内バズについて

#### (1) 町内バズとは

毎週1回（水曜日）6校時に、全校生徒が通学区域別集団として、11会場に分散して向き、教科プリントを中心に自主的なバズ学習や地域活動をしている。

#### (2) 町内バズが実践された背景

離島で漁業家庭の多い地域であり、しかも漁業者の多くが県外への長期出漁を余儀なくされているという実態がある。このため留守家庭を守って通学している生徒の多くは、家庭環境として多くの課題を背負っている。

(イ) 家庭学習の習慣が育ちにくい。

(ロ) 家庭的な愛情不足から情緒不安や対人関係についても孤立や対立を招きやすい。

(ハ) 学校におけるクラブ活動以外の、余暇の過ごし方として地域の中で善用策はないか。

上記のことから、一部の教師が日曜日などに近所の生徒達を教員住宅に集めて学習を見てやる程度の実践があり、学校では復習バズの実践があり、この形で地域全体にゆさぶりをかけては、の空気がでた。昭和47年夏の第4回全国バズ研究会の時点では全校態勢で受けと

めるまでになった。各地域ごとに会場提供をうけ、学校・生徒・保護者と地域ぐるみの町内バズが生れることになった。当時すでに姫路市立高丘中学校においては町内バズの実践がなされていたという事情もあって、町内バズの技術面・運営面については、高丘中学校の実践を取り入れることができた。

### 3. 町内バズのねらい

- (ア) 自主的な家庭学習の習慣化，地域ごとの仲間づくりと連帯感を高める。
- (イ) 保護者が当番制で町内バズに出席，わが子だけでなく地域の子でもとして見守ってもらえる人間関係をつくり，生徒・教師・保護者・地域社会相互の信頼関係を育てる。
- (ウ) 地域清掃や地域活動を通じて，中学生らしい生活態度を確立していく。

### 4. 実施方法

- (ア) 会場は， 11会場

- (イ) 学習内容

5教科を年間計画表に従って教師が学年別のプリントを作成し，それぞれの会場で学習する。地域活動の日は，年間計画表に従って正副バズ長で指揮運営に当る。

- (ウ) 進め方

午後2時45分に全校生徒がバズ会場ごとにグラウンドに集合。生徒会校外自治委員長の号令で2列縦隊，右側通行のもとに各会場に出発する。この際，交通指導にも配慮する。会場における町内バズの進行順序としては，○バズ長の号令 ○出席の確認 ○個人で課題に取りくむ ○学年ごとのグループでバズ ○解答 ○反省（自己評価） ○保護者の気づき発表 ○バズ長の号令 ○後片付 ○解散

- (エ) 家庭学習へのつながり

一応町内バズによって家庭学習への態度づくりや習慣化をねらった学習を経験させているわけであるが，さらに具体化させる試みとして，町内バズ用のプリントを作成する際，別に1枚家庭学習用のプリントをつくっておき，問題配布のときに渡しておく。生徒たちは町内バズ終了後，各自，自宅で学習し，その結果については，翌日木曜日の朝，10分間のHRの時間に教科委員が正解を発表して各自が自己評価する方法をとっている。また問題作成に当っては，なるべくやさしいものを多く出して，できる喜びと自信をもたせるように心がけている。

## 第7分科会（集団づくり）

推進協 豊高等学校 黒木 潤

### はじめに

豊高校は、1978年に大崎高校下島分校より独立して、7年目を迎えています。

今日まで、本校が一貫して取り組んできている教育課題は、「被差別部落の完全解放を期する教育内容の創造」ということです。そして、この地域の教育疎外の歴史をはね返し、地域の子どもの進路保障を達成しうる地域高校の創造という展望をもってきました。

その第一段階は、今日の高校教育における集中的な行政差別である分校差別撤廃のたたかいを教育活動を中心にして組織し、独立校化を勝ち取ることでした。

それは同時に、この地域において社会意識となっているといってもいい本校に対する差別意識の解消にもつながることでした。

分校当時、生徒の多くは教育疎外を受け続け、疲れ果て、学習意欲はそがれ、低位という烙印を押されて本校へたどりついたといっている状況がありました。差別に対する怒りはあっても、教育疎外の中で眠らされ、ついには自己疎外まで起こしている状況がありました。

今日の選別体制下において踏み台にされてきた彼らには、傷のなめ合い的な団結はあっても、およそ協同を志向する学習活動は弱く、いわゆる弱い者のいじめ的な行動が日常的にありました。

一方教師も、その差別実態の中で、自分の勤務している学校に対して強い差別意識をもたされていました。

こうした日常からの転機は、1969年に本校で起きた賤称語差別事件を契機として、この地域に起きた解放運動でした。

私たちは、自己の差別性に気付かされ、相互に点検し合う中で、何をしなければならぬかを考え始め、分校の差別実態をはね返す分校部運動のたたかいへとつないでいきました。

そして、独立校化を達成し、被差別部落の完全解放を期するという緊要の教育課題を幼・小・中・高一貫教育態勢づくりの中核として、さらに人間関係を基盤にした教育の科学化をめざすバズ学習との統合をはかる中で、すべての生徒の進路保障を達成していく取り組みが展開されることまできました。

この取り組みは、今日なお部落差別を温存助長させている社会構造を科学的に認識し、その変革を課題としてたたかえる真に民主的な主体者を育成することをめざしています。

ところが、独立校への展望が開けた時点での、自分たちが新しい高校を創るのだと胸をはって入学し、独立を目前にして果立っていった生徒たちの意気込みが継承されているとはいえない状況があります。

授業中に活気がなく、やれと言われればやるが主体性がなく、いわゆる他者依存型の生徒が増加し、しかも依存する相手がいなくてうろろうしている。そして、結局お互いに自分勝手な行動をしても気にならないといった状況がいまだに克服されていないのです。

その大部分の生徒は、豊・豊浜両中学校出身ではあっても、中学校当時とはその成員が違い、



しかも選別がかけられている中で、単なる成員集団であって準拠集団への高まりがほとんどみられません。

また、独立校になったとはいえ、いまだに分校的な差別実態を残している行政差別があり、地域社会の本校に対する差別意識は根強く残っております。生徒をとりまく地域の状況に大きな変革がみられない以上、直接的な背景といえる私たちの所へ一度返して考えてみなければなりません。

生徒の実態をどう受けとめるのか、どこまで生徒の枠組に入っていけるのか、私たち自身が克服したかに考えていた、生徒に対する差別意識の問題です。もう1つは私たち自身が主体者となりえているのかという問題です。

私たち教師は、自らの差別性をほりおこし、自己変革をしていく営みを軸にして、生徒と対面し授業改善をすすめていかなければなりません。

入学当初より強い疎外感を持っており、自分はどうせ駄目なんだという挫折感やあきらめから脱却できない生徒が多く、授業がわからないと投げけてしまいがちな状況を克服し、自己のおかれた立場を自覚し学習意欲を高めるための教育内容の創造、特に学習集団づくりの取り組みについて報告します。

まだ成果がみえていとは言えませんが、それは教員集団の反映であるにとらえ粘り抜いていこうと考えております。

#### 集団規範を高めるために

本校では教育指標として、「自主」「協同」「創造」を掲げています。

しかし、現状はきわめて不十分であり、まず自主性を育成するところから始めなければなりません。

自主性は、具体的な活動を通して、自ら体得していく性格のものであり、その手だてをどう仕組んでいくのかが、私たちの課題となってきます。

これまでの取り組みは、生徒に他者依存的な傾向が強いとしながら、一方ではあたかも自主性が身に付いているかのような、いわば建て前で押し通していたのではなからうか。自主的にやいなさいということが、結果的には私たちの逃げになったこともあるのではなからうか。

そのあたりを見すえて集団づくりを考えた時、基本的には集団決定方式を積み上げていかなければならないというところにゆきつきました。

この方式によって、生徒が自ら討議に参加し、決定に参加したという自我関与の意識に支えられ、行動に結びついていくことをねらっています。

次に、班編成ですが、集団への誘引度を高めるためには、成員の特性が充分配慮されたグループ構成が望まれます。昨年度までは、無作為にくじ引きによる構成と1ヶ月での交替が定着しており、変更はかなり困難でした。

今年度、新入生に対して、基礎学力をつけ、学習意欲を高めるためにグループ構成を考え、少なくとも1学期は継続してはどうかと、塩田先生から御助言いただき、実施しました。続いて3

年生が、さらに2学期からは2年生も実施することになりました。

しかし、適切な集団課題が提示できなければ、ひとりひとりが参加して、生き生きした集団討議はなされません。適切な課題提示、情報提供等の準備をしっかりといかねばなりません。

集団決定により、より高い集団規範がつけられ、それによってより望ましい行動が始まる。そして、また新しい集団規範を求めていくといった方向へ進むためには、集団決定に至るまでの粘り強い点検と指導が必要になってきます。

#### 集団討議を行なうために

言語力の弱さも指摘されているのですが、話し合いをしても司会ができない、話し方がわからないといった実態もあります。

したがって、集団討議のための基本話型を提示し、それに基づいて討議させるという訓練から始めなければなりません。そのことを通じて、話し合いの意義をつかませ、話し方、聞き方のルールもしっかり確認させていかなければなりません。

それは討議に必要な態度形成の問題であり、成員の人間としての相互承認をうながすものだからです。

ただし、高校生という発達段階を考えると、細かいパターン提示ではなく、骨格を示すにとどめ、肉づけをする作業は生徒自身の手でやらせるという配慮が必要です。

その作業を通じて、集団討議の意義を再確認することにもなるでしょう。

#### 新入生に対する一学期の取り組み

高校生活のスタートに際し、入学式後のLHRにおいて、学年通信により大きく2つの方向を確認しました。

ひとつは、私たちのめざしている目標は、だれとでも協同してひとつのことをやり遂げていく態度を養うことであり、この目標の達成は、将来民主的な社会を建設していく上で最も重要なことだということです。

もうひとつは、学校は、自分が自分のために学習していく場であるということです。そのためには、自らがすすんで学習していくという自主性が不可欠のものだということです。

この2つのことを確認することにより、人は集団の中で、成長していくという基本的な考え方を提示し「共に生きる集団づくり」をめざしていくと提起しました。

これらの目標に向けての具体的な活動の第一段階として、仲間づくりを目的とした班編成を行ないました。出身中学校(地区)を考慮し、さらにYG性格検査、入試の成績、中学校よりの聞きとりを加味して班編成をし、一日も早くお互いに心を許して語り合えるクラスメートになるためにまず知り合い話ができるようになるという具体的な行動目標を達成していきました。

その班を軸にして、学年通信「自己紹介号」の作成、各班の重点目標づくり、等の活動を行なってきました。

その間、仲間づくりと並行して、生徒一人一人の現状をしっかりとつかみ、何ができるか、ど

これから始めればよいかを知るために、基礎学力検査（国語，社会，数学，理科，英語）知能検査  
欲求検査，作文を行ないました。

これらの資料を整理し，学級調査を加えて学習集団づくりへむけての班編成にあたりました。  
担任を中心として各教科担当にも参加してもらい，次の要領で班編成をすすめました。

- (1) 班の構成員は4名とする。
- (2) 低位な生徒が多い数学と英語の学力検査のデータを中心に学習班長を選ぶ。
- (3) 各班が等質になるように，また男女が組み合わせられるように編成する。
- (4) 学級調査，YG性格検査をもとに修正を加える。
- (5) 身体検査結果をもとに（特に身長・視力・聴力），各班の位置，各個の席を決める。

5月9日のLHRにおいて，趣旨説明をし，班を提示しました。

一学期間は，この学習班を中心にして，お互いに得意とするものを出し合い，分担し合い，協  
力し合って，学習活動をより高めていこうということを提起したのです。

そして，学習活動において班をリードしていく学習班長を選出し，各班毎に集団として高めあ  
っていくための目標を設定し，新しい班編成による学習活動をスタートしました。

さらに，各教科担当に，座席表を配布し，授業での班活動の状況を，メモ程度にかき込んで  
もらう作業を要請しました。

6月5日～8日まで，学習集団として高まることを目的にして，庄原七塚原青年の家で集団宿  
泊訓練を行ないました。事前に実行委員会を組織し，生徒の手で要項や資料づくりも不十分では  
ありましたができました。教師側からは，話し合いのルール等を提示し，それにもとづいて討議  
する訓練を行ないました。ここでも集団決定方式によって1人1人が決意表明をしていくことを  
行なっています。

6月後半からは，生活指導を中心にして個別指導の徹底をはかるために面接を行なると同時に  
地域懇談会，家庭訪問を通して，保護者に協力を呼びかけ，「学習集団づくり」の取り組みの趣  
旨，内容について説明をし，教育活動を理解していただくことも，すすめてきました。

夏休みに入って，1学期間の資料を整理し，まず子どもをつかみ指導の方向をつかむために事  
例研究会をもちました。

このことと，一学期の生徒の反省や意見をもとに総括をし，二学期にむけて新しい班編成を行  
ないました。

今後の課題としては，学級（学年）通信が担任の側からの意志伝達や情報提供が大部分になっ  
ているのを，生徒自らのものにしていくことがあります。その編集会議の場が討議の訓練の場  
にもなるはずで。

また，生徒が自己表現をめざして努力しうるかどうかは，彼らが自己評価力を身につけている  
かどうかにかかっています。

そのために，学習態度形成が重要であることを認識させるために，全学習活動の評価システム  
の改善が大きな課題となっています。